

第 25 回 YCK 横浜教区カテキスタ会公開講座
2023 年 9 月 30 日、カトリック雪ノ下教会大聖堂

教皇ベネディクト十六世のカテケージス

岩本潤一（一般財団法人日本聖書協会総務主事）

初めに――ベネディクト十六世の「カテキズム」と「カテケージス」

第 25 回を迎える YCK 横浜教区カテキスタ会公開講座講師としてお招きいただいたことを感謝する。記録を拝見すると、1996 年から始まったこの講座では吉山登神父から始まり、錚々たる司祭の皆様による講演が行われてきており、信徒の講師はわたしが初めてのようである。一信徒にすぎない者がこの講演の講師にふさわしいかどうかは疑問に思われるが、最初に主催者からご連絡いただいた折、これは梅村昌弘司教様のご指名によることだったので、力不足ながら講師を引き受けさせていただいた次第である。

講演者は、かつて 2003 年から 2014 年まで日本カトリック司教協議会の司教協議会秘書室研究企画という部署にいた。その司教協議会在職時期が、たまたまベネディクト十六世が 2005 年に教皇に就任してから 2013 年に退位するまでの時期と重なり、ベネディクト十六世の諸文書や講話を翻訳し、その教えの一端を学会等で発表した。講演者が指名されたのは、おそらくそのためであろうと思われる。

ところで、主催者から講演のタイトルとして指定されたのは「名誉教皇ベネディクト十六世のカテキズム」であった。今回、このタイトルを「ベネディクト十六世のカテケージス」に変更させていただいたのは、次の理由による。

第一に、「名誉教皇」とすると 2013 年の教皇辞任から逝去の 2022 年までの期間のベネディクト十六世に限定されかねないので、「教皇ベネディクト十六世の」としたい。

第二に、「カテキズム」は厳密には『ローマ・カテキズム』、『カトリック教会のカテキズム』、『カトリック教会のカテキズム要約（コンペンディウム）』、『YouCat』のような「本」としてのカテキズムに限定され、このうち二番目と三番目に挙げたカテキズムがラッツィンガー教理省長官（ないし教皇ベネディクト十六世）のもとで作成されたにしても、そのカテキズムに個人名を付すのは適当でないように思われる。「ベネディクト十六世のカテキズム」というものはそもそも存在しない。

第三に、むしろ、ベネディクト十六世がその教皇職において行おうとした信仰教育（カテケージス）について広く講演でお話しするほうが、講演を聞かれる皆様の参考になるのではないか。

ところで、「カテキズム」と「カテケージス」の違いについて、YCK 横浜教区カテキスタ

会の皆様に改めて説明するまでもないかと思われるが、講演に来られた一般の方々のために、いちおう確認しておきたい。『カトリック教会のカテキズム』は「序論」で「カテケージス」の意味を次のように定義している。

4 教会は、人々を弟子とし、人々が信仰によってイエスのみ名によっていのちを得るためにイエスを神の子として信じるように助け、またその生き方を導き、教えて、キリストのからだを築くために力を尽くしています。これらはまとめて、早くから、**カテケージス**と称されていました。

5 「カテケージス（要理教育）」は、一般的にいて、児童、青年、大人の信仰教育で、これは信者をキリスト教的生活に導くために、普通は組織的かつ体系的に行われるキリスト教教理の教授を特徴としています。

一方、このカテケージスを文書としてまとめたものが「カテキズム」である。

9 カテケージスを通しての奉仕は、つねに諸公会議から新しい力をくみ取りました。中でもトリエント公会議はそのみごとな例を示しています。すなわち、この公会議はその憲章と教令の中で、カテケージスをとくに重要視し、トリエントの名を冠する『ローマ・カテキズム』が編集されるきっかけとなりました。

そして、『ローマ・カテキズム』（1566年）がトリエント公会議（1545-63年）の教えのもとに教会の教えをまとめたのに対して、近年刊行された『カトリック教会のカテキズム』は、第二バチカン公会議（1962-65年）の教えを背景にして教会の教えを提示¹したものであった。

先に述べたとおり、『カトリック教会のカテキズム』は、教皇ヨハネ・パウロ二世の委託を受けて、当時の教理省長官であるJ・ラッツィンガー枢機卿（後の教皇ベネディクト十六世）を長とする委員会により草案が作成され、1992年にヨハネ・パウロ二世によってフランス語版が認可・公布された。さらに同じラッツィンガー枢機卿を委員長とする委員会がラテン語規範版を作成し、ヨハネ・パウロ二世によって1997年に公布された。

ところで、この『カトリック教会のカテキズム』はあまりに分量が大きかったので、ヨハネ・パウロ二世は2003年にラッツィンガー教理省長官を委員長とする特別委員会を設置し、『カトリック教会のカテキズム』の内容をより簡潔にまとめた『要約』を起草させた。この「『要約』は2005年4月の教皇ヨハネ・パウロ二世の逝去に伴い、奇しくも、文書編纂責任者のラッツィンガー枢機卿の「序文」と、教皇ベネディクト十六世の「自発教令」を付し

1 拙稿「『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約』——その神学的意味」『日本カトリック神学院紀要』第2号（2011年）、157-158頁。

て 2005 年 6 月 28 日に公布された」²。

先に「『ベネディクト十六世のカテキズム』というものはそもそも存在しない」と述べたが、『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約（コンベンディウム）』は、以上述べたとおり、J・ラッツィンガー枢機卿／ベネディクト十六世が中心となって作成され、後者は自身によって公布までされた点で、ベネディクト十六世と深く関連することは言うまでもない。さらに後者はベネディクト十六世の思想そのものとも関わることを別の機会に指摘した。たとえば、以下の点である。

（一）103 問は「イエスのエジプトからの帰還は、エジプト脱出を想起させ、イエスを新しいモーセとして示します」と述べるが、「イエスを新しいモーセとして示す」という解釈は『カトリック教会のカテキズム』になく、むしろベネディクト十六世の思想に見いだされるものである³。

（二）173 問の質問「教会はどのような意味で宣教的なのですか」は、内容的には『カトリック教会のカテキズム』の参照箇所（852-856）と対応するが、教会が「宣教的」という表現は『カテキズム』になく、ベネディクト十六世の教皇職が強調する教会の性格である⁴。

（三）第 3 編第 2 部冒頭の図版の解説の記述「平地よりも高く天に近い山は、神と出会う特別に恵まれた場所を意味しています」（邦訳 222 頁）も、ベネディクト十六世の筆によるものであることを窺わせる⁵。

本講演は、ベネディクト十六世の「カテキズム」そのものを扱わず、むしろ教皇がその教皇職を通じて行ったカテケージスの内容と特徴を限られた時間の中で紹介しようとするものであるが⁶、このベネディクト十六世のカテケージスと、ラッツィンガー枢機卿／ベネデ

2 同 163 頁。

3 教皇ベネディクト十六世ヨゼフ・ラッツィンガー『ナザレのイエス』里野泰昭訳、春秋社、2008 年、22 頁以下参照。拙稿「文献・図書紹介 教皇ベネディクト十六世ヨゼフ・ラッツィンガー『ナザレのイエス』」『カトリック教育研究』第 27 号（2010 年）、63-64 参照。

4 教皇ベネディクト十六世「アレルヤの祈りのことば（2007 年 5 月 27 日）」（『霊的講話集 2007』、157 頁）参照。拙著『現代カトリシズムの公共性』第 9 章「ベネディクト十六世の教皇職」187 頁も参照。なお、第二バチカン公会議『教会の宣教活動に関する教令』（*Ad gentes*）2「地上を旅する教会は、父である神の計画に従って、御子の派遣と聖霊の派遣とに由来するのであるから、その本性上、宣教的である」参照。

5 「「山」は、イエスの祈りの場所、父と目を合わせて語る場所です」（前掲『ナザレのイエス』里野泰昭訳、100 頁）参照。

6 なお、ベネディクト十六世の教皇職の概要については前掲「ベネディクト 16 世の教皇職」『現代カトリシズムの公共性』、181-209 頁参照。

クト十六世が中心となって作成した『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約(コンペンディウム)』との深い関わりを否定するものではない。むしろ、以下で明らかにしたいのは、〈ベネディクト十六世のカテケージスは、彼が中心となって作成した『カトリック教会のカテキズム』を自らの言葉で改めて説明・展開しようとしたものでないか〉ということである。

なお、本講演で言う「ベネディクト十六世のカテケージス」が行われた場面は、水曜一般謁見での「カテケージス」に限らず、教皇が行った講話・説教のすべてと、教皇が発布した公文書の内容を含む、広く教皇の行った宣教活動全体である。

ちなみに、教皇のカテケージスと、『カトリック教会のカテキズム』との密接な関係についても、初めに指摘しておきたい。すなわち、

(一) 2006年から2012年にかけての6年間、教皇は水曜一般謁見の中で、使徒から始めて近代の教会博士に至る115名余の教会の先人の信仰の歩みをたどり直したが⁷、これは『カトリック教会のカテキズム』における数多くの「引用」を、改めて時系列に著者ごとに説明したものである。

教父、典礼、教導職の教え、あるいは聖人伝から取った小字の引用は、教理的な解説を豊かにするためのものです。しばしば、これらの引用箇所はカテケージスに直接役立たせるために選ばれました⁸。

(二) また、教皇が始めた「信仰年」(2012年10月11日～2013年11月24日)に際して行われた水曜一般謁見での13回の連続講話『信条(クレド)』(2012年10月17日～2013年2月6日)は、『カトリック教会のカテキズム』「第1編 信仰宣言」に沿った講話であり、教皇の退任により第1部第1章から始めて第2部第1章までで中断したとはいえ、『カトリック教会のカテキズム』に基づく教皇のカテケージスである。

(三) 水曜一般謁見において、『女性の神秘家・教会博士』に続いて行われた連続講話『イエスの祈り』『新約の祈り』(2011年5月4日～2012年10月3日)は、『カトリック教会のカテキズム』「第4編 キリスト教の祈り」に対応する。さらに邦訳『新約の祈り』に収めた最後の2回の「典礼における祈り」(2012年9月26日、10月3日)は、『カトリック教会のカテキズム』「第2編 キリスト教の神秘を祝う」に対応している。「信仰年」の連続講話で中断されなければ、「感謝の祭儀」の考察が続いたものと思われる⁹。

7 『使徒——教会の起源』『教父』『中世の神学者』『女性の神秘家・教会博士』。拙稿「出会い・本・人 ベネディクト十六世の信仰」『本のひろば』第657号(2012年12月号)、1頁参照。

8 『カトリック教会のカテキズム』21。

9 ベネディクト十六世の聖体論は、シノドス後の使徒的勧告『愛の秘跡(2007年2月22日)』(*Sacramentum caritatis*)にも見ることができる。

主に願いたいと思います。日々、典礼を、とくに感謝の祭儀を生きることを学ばせてください。教会という「わたしたち」の中で祈り、自分ではなく、神に目を注ぐことによって。そして、自分があらゆる場所と時の中で生きる生きた教会の一部であると感じることによって¹⁰。

(四) 最後に、2012年に「信仰年」を開催するに際して、教皇は『カトリック教会のカテキズム』の意味を改めて強調している。

信仰内容を体系的に知るために、だれもが『カトリック教会のカテキズム』のうちに正確で不可欠の手段を見いだすことができます。『カトリック教会のカテキズム』は第二バチカン公会議のもっとも重要な成果です。第二バチカン公会議開幕30周年を記念して（それは偶然ではありません）署名された、使徒憲章『ゆだねられた信仰の遺産』の中で、福者ヨハネ・パウロ二世は述べます。「このカテキズムは……教会の生活全体にかかわる刷新事業に、きわめて重要な寄与をもたらすでしょう。……わたしはこのカテキズムを、教會的交わりのために役立つ権威ある道具、また信仰を教えるための確実な規範として認定します」。

このような意味で「信仰年」は、『カトリック教会のカテキズム』のうちに体系的かつ有機的にまとめられた信仰の根本的内容を再発見し、研究するための真摯な努力を行わなければなりません。実際わたしたちは、この文書のうちに、教会が二千年の歴史の中で受け入れ、守り、示してきた豊かな教えを見いだすことができます。教会は、信者の信仰生活を確かなものとするために、さまざまなしかたで信仰を考察し、教理を発展させてきました。『カテキズム』は、聖書から教父まで、諸世紀における神学の師から聖人までのこのような営みを恒久的なしかたで記録します。

『カトリック教会のカテキズム』は、その構成自体において、日々の生活の重大なテーマに関連する信仰の発展を示します。どの頁を見ても、そこに示されるのは、理論ではなく、教会の中に生きているかたとの出会いです。信仰告白に続くのは、秘跡の生活に関する説明です。キリストは秘跡の生活の中に現存し、働き、ご自身の教会を築き続けるからです。典礼と秘跡がなければ、信仰告白は力を失います。典礼と秘跡がなければ、キリスト信者のあかしを支える恵みを失うことになるからです。同じ基準に従い、『カテキズム』の道徳生活に関する教えは、信仰と典礼と祈りと関係づけられることによって完全な意味をもちます¹¹。

10 『新約の祈り』163頁参照。

11 教皇ベネディクト十六世自発教令『信仰の門——「信仰年」開催の告示（2011年10月11日）』（*Porta fidei*）11、邦訳16-17頁。

1. ベネディクト十六世の「靈的遺言」と「信仰の合理性」

1.1. 「靈的遺言」と「信仰の合理性」

ベネディクト十六世は2013年2月27日に退位し、2022年12月31日に95歳で逝去するまで、バチカン内のマーテル・エクレジアエ修道院で退位後の日々を過ごした。逝去が発表されたのと同じ12月31日には、教皇の「靈的遺言」¹²が発表された。葬儀の行われた2023年1月5日には「ロジト（埋葬証明書）」¹³が発表された。

「靈的遺言」で注目されるのは、まずこの靈的遺言が書かれた2006年8月29日という日付である。教皇はこの直後、ドイツを司牧訪問し（9月9日～14日）、9月12日にかけて教鞭をとったレーゲンスブルク大学で「信仰、理性、大学——回顧と考察」¹⁴と題する講演を行っている。同講演は、イスラームの人々から批判が寄せられたことで有名であるが、そのテーマは「信仰と理性」であった。

教皇は「靈的遺言」の中で、初めに両親およびドイツ・バイエルンの地で生まれた信仰に感謝する。

わたしは両親に感謝します。二人は困難な時代の中でわたしに命を与え、大きな犠牲と愛をもってわたしにすばらしい家庭を用意してくれました。この家庭は今日に至るまで日々明るい光を輝かせてくれました。父の透明な信仰は、われわれ子どもたちに信じることを教え、わたしのあらゆる学問的認識の中でますます堅固な道しるべになってくれました。母の深い信心と大きないつくしみは、感謝し尽くすことのできない遺産であり続けています。姉は数十年にわたり献身的に優しい気遣いをもってわたしに仕えてくれました。兄は透明な判断と力強い決意とほがらかな心で常にわたしの道を平らにしてくれました。兄が常にわたしに先立って歩み、同伴してくれなかったなら、わたしは正しい道を見いだすことができなかつたでしょう。

12 邦訳は本講演原稿の巻末「資料1」参照。邦訳は『上智大学キリスト教文化研究所紀要』40（2023年3月24日）77-82頁所収。

13 邦訳は本講演原稿の巻末「資料2」参照。邦訳はバチカン放送局による。

14 『靈的講話集 2006』258-280頁。同講演については拙著『現代カトリシズムの公共性』、200-201頁、「ベネディクト16世の教導職における自然法論」『カトリック教育研究』30号（2013年）1-12頁、特に5-6頁、「信仰の合理性——現代カトリシズムの公共性をめぐって」『東洋学術研究』第55巻第2号（2016年）、38-59頁、特に48-49頁、「[書評と翻訳]戸田聡『古代末期・東方キリスト教論集』新教出版社／教皇ベネディクト十六世『靈的遺言』』『上智大学キリスト教文化研究所紀要』40（2023年3月24日）77-82頁参照。

「ロジト」に記されているとおり、教皇は「パッサウ教区（ドイツ）内の、マルクトル・アム・インに、1927年4月16日に生まれた。彼の父は警察官で、バイエルン南部の農家の出身、その経済的状況はつつましいものであった。母はキーム湖のほとり、リムスティングの職人の娘で、結婚前はいくつかのホテルで調理をしていた。幼少期と少年期を、オーストリア国境に近く、ザルツブルグからおよそ30kmの小さな町、トラウンシュタインで過ごし、ここでキリスト教的・人間的・文化的育成を受けた」。幼い日々には教皇（ラッツィンガー）が見いだしたのは、きわめて素朴な信仰であった。

私の両親をはじめ、私が出会うことのできた、信仰に生きた多くの人々のまじり気のない純粋な人間性以上に、確かな信仰の証しを私は知りません¹⁵。

初聖体を受けた日（1936年3月、ラッツィンガー8歳）を思い起こしながら、教皇は言う。

初聖体はすばらしい日でした。わたしたちには次のことがわかりました。イエスご自身がわたしたちのところに来てくださいます。イエスは遠く離れたところにおられる神ではありません。イエスはわたしの人生の中に、わたしの心の中に入ってこられます¹⁶。

しかし、「信仰年」開催を告示するにあたって、教皇は言う。

過去においては、統一的な文化状況を見いだすことが可能でした。信仰の内容と、信仰から靈感を受けた価値観に訴えることも広く受け入れられていました。しかし、現代においては、社会の広い分野において、同じことをいうことはできません。信仰の深刻な危機が多くの人々に影響を及ぼしているからです¹⁷。

この「信仰の深刻な危機」の具体的なありようについて、最近ドイツでサバティカルを過ごした吉田新教授（東北学院大学）は次のように指摘している。

近年、ドイツのキリスト教会の凋落は著しく、その勢いは年々増している。直近のデータでは、2021年末時点でプロテスタント教会の教会員数は1,972万5千人であり、

15 ベネディクト 16 世 ヨゼフ・ラッツィンガー『新ローマ教皇 わが信仰の歩み』里野泰昭訳、春秋社、2005年、138頁。

16 「教皇庁児童福祉会の子どもたちとの対話（2009年5月30日）」『霊的講話集2009』、209-210頁。

17 教皇ベネディクト十六世自発教令『信仰の門——「信仰年」開催の告示（2011年10月11日）』2、邦訳4頁。

前年比で2.5%減となった。高齢の教会員の死者数は年々増加し、出生率もかつてより低いため受洗者（入会者）も少なく、自然減で教会員は確実に減っている。さらに、それに追い打ちをかけているのは教会脱会者の増加である。2021年、プロテスタント教会の脱会者は約28万人を数えている。カトリック教会では2021年、約36万人が教会を去ったと報告している。このような脱会者の急増はコロナ禍もさることながら、カトリック教会のスキャンダルが影響していると考えられている¹⁸。ただし、信徒数が減少しているとはいえ、統計上は现阶段でもドイツの総人口の5割ほどがキリスト教徒である。

しかしながら、教会を取り巻く状況は決して楽観できるものではない。統計調査によれば、2060年には現在の信徒数の半分になると考えられている。つまり、約40年後は現在の人口比でいえばキリスト教徒は2から3割程度になる。教会税の税収により運営されるドイツの教会組織は、このままでは確実に今のような形を維持できない。そのため、ドイツ福音主義教会（Evangelische Kirche in Deutschland、以下、EKD）は、この「2060年問題」を見据えて、教会員を引き留めるためにあらゆる方策を練っている¹⁹。

〔……〕人々を教会に引き留めること、なかんずく若年層を教会に引き寄せ、聖書に関心を持ってもらうことは喫緊の課題である²⁰。

こうした状況のもとに、『靈的遺言』で教皇はこう呼びかけるのである。

すでに故国（ドイツ）の人々に述べたことを、わたしが教会で仕えるようにゆだねられたすべての人々にここで申し上げたいと思います。信仰を固く保ってください。信仰から離れてはなりません。

「信仰年」に際して教皇はキリスト信者に呼びかける。

わたしたちが告白し、記念し、生き、祈る信仰の内容を再発見し、信じることにつ

18 ZDF（第2ドイツテレビ）の2022年6月27日の報道より

（<https://www.zdf.de/nachrichten/panorama/katholische-kirchenaustritt-rekord-100.html>）。2022年8月31日閲覧。（吉田論文注）

19 詳細はEKDのHPを参照（<https://www.ekd.de/kirche-im-umbruch-projektion-2060-45516.htm>）。2022年8月31日閲覧。2021年、EKDは総会議長に若干25歳（当時）の学生であるアンナ＝ニコル・ハインリヒ（Anna-Nicole Heinrich）を選出したのも、このような背景があるといえる。EKDは若さをアピールしている。（吉田論文注）

20 吉田新「BasisBibelと聖書翻訳の未来」『New 聖書翻訳』第8号（2022年）62-63頁。

いて考察することは、特に「信仰年」の間、すべての信者が自分のものとしなければならぬ務めです²¹。

さらに教皇は、「信仰年」にあたって「決定的に重要なことは、信仰の歴史をたどり直すことです」とも述べている。

信仰の歴史は、聖性と罪がより合わされた、はかりしれない神秘によって特徴づけられているからです²²。

『使徒——教会の起源』から『女性の神秘家・教会博士』に至る連続講話は、まさに教皇による「信仰の歴史のたどり直し」だったのである。

「靈的遺言」の中で、教皇はこの信仰を、科学（自然科学と聖書学）がもたらす「見せかけの確信」から守ることを呼びかけている。

しばしば、一方では科学、すなわち自然科学が、他方で歴史的研究（特に聖書釈義）が、論駁不能な、カトリック信仰と反対の知見を提示するかのように見えます。わたしは、はるか昔から自然科学が変化するのを目にしてきました。そして、逆に、信仰に反する見せかけの確信は消えうせ、それは科学ではなく、見かけ上科学に属するものにすぎない哲学的解釈であったことが明らかになりました。むろん信仰もまた、自然科学との対話によって、その主張の範囲の限界と自らの独自性を認識することを学びました。わたしは60年来、神学、特に聖書学を学んできました。そして、何世代にもわたり、揺るぐことがないかのように思われていた命題が崩壊し、単なる仮説にすぎないものだったことが明らかになるのを目にしてきました。自由神学の世代（ハルナック、ユリヒャーなど）、実存主義の世代（ブルトマンなど）、マルクス主義の世代です。わたしは、混乱した仮説から信仰の合理性が立ち現れ、今も立ち現れ続けているのを目にしてきました。イエス・キリストはまことに道であり、真理であり、命です。そして教会は、そのあらゆる不十分さにもかかわらず、まことにキリストの体です。

教皇が言及する過去の「世代」に関して、一言、注釈を加えておく必要がある。自伝『新ローマ教皇 わが信仰の歩み』の中で、ラッツィンガー枢機卿（当時）は、1963～1966年にミュンスター大学で神学を教えていた頃の状況をこう振り返っている（ハルナックについては後述）。

21 『信仰の門——「信仰年」開催の告示』9、邦訳12頁。

22 同13、邦訳19頁。

私はミュンスターにおいても「時のしるし」をますます身に染みて感じていましたが、それは目に見えて劇的な展開へと変わっていきました。はじめのうちは、エルンスト・ケーゼマンによる訂正を施したルドルフ・ブルトマンの神学が全体の傾向を支配していました。66 から 67 年にかけての冬学期に行った私のキリスト論の講義は、この傾向との対話を基にしていました。1967 年には、カトリック神学部創立 150 周年の式典を華々しく祝うことができました。しかし、これは旧来の形式による最後の大学の祝祭となりました。学生や一部の教師の思考の基となっていた、世界観的な「パラディグマ」(基本思考形式)は、ほとんど突然とってよいほどの急激さで変わってしまったのです。

それまで思考の枠を決定していた、ブルトマンの神学とハイデガーの哲学という実存主義的な枠組みは、ほとんど一夜にして崩壊し、マルクス主義の枠組みによって代わられたのです。テュービンゲンでは、いまやエルンスト・ブロッホが教壇に立ち、ハイデガーはとるに足らないプチブルのひとりとして、軽蔑されることとなったのです。プロテスタント神学部では、『希望の神学』という魅力的な本において、ブロッホによるまったく違った視点から神学を新しくとらえなおしたユルゲン・モルトマンが、私とほぼ同じ時期に招聘されました。

実存主義が崩壊し、マルクス主義の革命が全大学に燃えひろがり、大学をその根底から揺り動かしました。数年前までは、神学部はマルクス主義の誘惑に対する最後の牙城と期待されていました。いまや正反対のことが起きたのです。神学部はイデオロギーの本丸と化しました。ブルトマンが行なったような神学への実存主義の導入は、神学にとって危険がないわけではありませんでした。すでに述べたように、私は私のキリスト論において、すべてを実存主義に還元する試みに対し、戦いを挑んだのでした。それにとどまらず、いくつかの箇所ではさらに、特に、次に計画していた神論において、マルクス主義的な思考をとりあげ、それを実存主義への対立軸として置いたのでした。マルクス主義は、ユダヤ的、メシア的な根源からその生命力を得ており、それゆえ十分に聖書的な契機を保存しているからです。

しかし神学の破壊、すなわちマルクス主義的なメシアニズムの意味で進められた神学の政治化は、比較にならないほど過激なものでした。それは聖書的な希望の上に立ちながら、希望の意味を正反対にしてしまうのです。宗教的情熱はそのまま保ちながら、神を締めだして、人間の政治的行動を神にとって代わらせるものだったからです。希望をそのまま残しつつも、党と全体主義が神の座を占め、偽りの神に人間性を犠牲として捧げる無神論的な崇拜が行われたのです²³。

23 ベネディクト 16 世 ヨゼフ・ラツィンガー『新ローマ教皇 わが信仰の歩み』里野泰昭訳、春秋社、2005 年、145-147 頁。

「マルクス主義的なメシアニズムの意味で進められた神学の政治化」の問題について、後にラッツィンガー枢機卿は教皇庁教理省長官（1981～2005年）時代に「解放の神学」への対応において再び直面することになり²⁴、最終的に回勅『希望による救い』（2007年）でも考察することになる。

20 十九世紀は、人間の希望の新たな形としての進歩への信仰を支持し、理性と自由は、希望の道を歩むために従うべき導きの星だと考え続けました。けれども、技術の発展とそれに伴う工業化がますます進展するにつれて、やがてまったく新しい社会状況が生まれました。工業労働者と、いわゆる「工業プロレタリア」階級の出現です。これらの階級の悲惨な生活状況をフリードリヒ・エンゲルス（1820-95年）は1845年に戦慄的なしかたで描きました。エンゲルスの読者にとって、なすべきことは明らかでした。このような状態が続いてはなりません。変革が必要です。しかし、変革とは、ブルジョワ社会の構造全体を揺さぶり、転倒させることでした。1789年のブルジョワ革命の後、新たなプロレタリア革命のための時が到来しました。進歩は、ただ直線的に、少しずつ進むだけではいけません。革命的な飛躍が必要とされます。カール・マルクス（1818-83年）はこの時代の呼びかけにこたえて、言語と思考の力をもって、この救いに向かう歴史の新たな大いなる——そしてマルクスの考えでは——決定的な歩みを開始しようと努めました。それはカントが「神の国」と述べたものに向かう歩みでした。来世の真理を退けたなら、今や問題は地上の真理を打ち立てることです。天国の批判は地上の批判に変わり、神学批判は政治批判に変わります。よりよい世界、決定的によりよい世界への進歩は、科学だけでなく、政治によってもたらされます。すなわち、科学的に思考する政治によってもたらされます。この科学的に思考する政治は、歴史と社会の構造を認識し、そこから、革命、すなわち万物の変革への道を示します。マルクスは、党派的な一面性はあるものの、きわめて正確に当時の状況を記述し、優れた分析力をもって革命への道を提示しました。彼はそれを理論的に行っただけではありません。1848年の『共産党宣言』で生まれた共産党によって、彼は革命を開始させたのです。マルクスの示した約束は、その正確な分析と、彼がはっきりと示した急進的変革の手段のゆえに、人々を引きつけましたし、今なお引きつけ続けています。その後、革命は、ロシアにおいてもっとも徹底的なしかたで行われました。

21 しかし、革命の勝利とともに、マルクスの根本的な誤謬も明らかになりました。マルクスは既存秩序を転覆させる方法を正確に示しました。けれども彼は、その後、進む

24 教皇庁教理省『解放の神学のいくつかの側面に関する指針』（1984年）、同『自由の自覚 キリスト者の自由と解放に関する教書』（1986年）カトリック中央協議会、1987年参照。

べき道については述べませんでした。マルクスはただ、支配階級からの財産の没収、政治権力の没落、生産手段の共有化によって、新しいエルサレムが実現すると想定しただけでした。実際、そうすれば、あらゆる矛盾は解消し、人間と世界はついに完全なものとなるはずでした。そうすれば、すべてのことは正しい道を進むことができるはずでした。すべてのものはすべての人のものとなり、すべての人は互いの最善のことを望むはずだったからです。こうしてレーニン（1870-1924年）は、革命を達成したとき、自分の師が今後の進むべき道について何も指示を与えていないことに気づかなければなりませんでした。確かにマルクスは、プロレタリアートが独裁を行う過渡期が必要であると述べていました。この過渡期はやがて自動的に不要となるはずでした。わたしたちはこの「過渡期」について知りすぎるほどよく知っています。わたしたちはまた、この「過渡期」がその後どのように展開したかも知っています。「過渡期」は完全な世界をもたらさず、むしろ、絶望的な破壊の跡を残しました。マルクスは新しい世界に必要な秩序をもたらす方法について考えませんでした。そのような秩序は不要となるはずだったからです。この問題に関するマルクスの沈黙は、彼の出発点から論理的に導かれた結果でした。マルクスの誤謬は深いところにあります。マルクスは人間がいつまでも人間であり続けることを忘れていました。人間と、人間の自由を忘れていました。自由はつねに悪を行う自由でもあり続けることを忘れていました。マルクスは、経済が秩序正しいものとなるならば、万事は自動的に秩序正しいものとなると考えました。マルクスの真の誤謬は唯物論にあります。実際、人間は単なる経済条件の生産物ではありません。有利な経済条件を作り出すことによって、外部から人間を救うことはできないのです²⁵。

『靈的遺言』に戻ると、ここで使われる「信仰の合理性」（*Vernunft des Glaubens*; *ragionevolezza della fede*）は上述のレーゲンスブルク大学での講演で用いられたキーワードである。同講演の中で教皇は言う。――信仰には本来理性（ロゴス）との密接なかわりがある。旧約宗教における偶像からの解放は、ギリシア哲学における神話からの解放と対応する。70人訳ギリシア語聖書におけるヘブライズムとヘレニズムの出会いは、キリスト教の成立そのものに決定的な影響を与えた。いずれにせよ、キリスト教神学において基盤となるのはロゴスとして自らを啓示した神である。一方で、キリスト教における信仰と理性（合理性）の結びつきを断ち切ろうとする「キリスト教の非ヘレニズム化」の思潮が、後期中世の主意主義に始まり、とくに近代初頭以降、神学の中に現れた（宗教改革、自由主義神学、インカルチュレーション）。とりわけ自由主義神学の代表者ハルナック（1851-1930年）は、「学」としての神学の構築のために歴史的・批判的聖書釈義を重んじ、キリスト教を哲学的・神学思想から解放することを目指した。その枠組みとなっているのは、近代の自己限定した理性概念である。

25 教皇ベネディクト十六世回勅『希望による救い（2007年11月30日）』20-21、邦訳44-47頁。

批判的に浄められたギリシアの遺産が、本質的なしかたでキリスト教信仰に属するという、この主張は、キリスト教の非ヘレニズム化への要求によって反対されています。この要求は、近代初頭以来、神学の議論をますます支配するようになりました。詳しく見ると、非ヘレニズム化には三つの波があるのを認めることができます。この三つの波は、互いに関係していますが、その動機と目的においてははっきり区別できるものです。

非ヘレニズム化はまず、十六世紀の宗教改革の要求において現れました。宗教改革者たちは、スコラ神学が、完全に哲学によって規定された信仰の体系化であり、いわば信仰に由来しない思考によって信仰を異質なものとして規定したものだと考えました。その結果、信仰は生きた歴史的なことばではなく、一つの哲学体系となりました。

これに対して、「聖書のみによって」(Sola Scriptura) は、聖書のことばの中に本来存在していた、信仰の純粋な原型を探究しました。形而上学は、別のところに由来する前提とされました。信仰は、本来の姿を取り戻すために、形而上学から解放されなければなりません。カントは、信仰に場所を与えるために、思惟を脇に置かなければならないと述べました。これによって、彼は、宗教改革者たちが予想できなかったような徹底したしかたで、宗教改革者のこの計画を実行したのです。こうしてカントは、信仰を実践理性のみに基づかせ、信仰から現実全体に通じる道を閉ざしました。

十九・二十世紀の自由主義神学は、非ヘレニズム化の主張の第二の波をもたらしました。その代表者はアドルフ・フォン・ハルナックです。わたしが学生だった頃、また、わたしが教え始めた最初の頃は、この主張がカトリック神学にも強く影響していました。この主張の出発点とされたのは、バスカルによる、哲学者の神と、アブラハム、イサク、ヤコブの神との区別です。

1959年のボン大学での教授就任講義の中で、わたしはこの問題に答えようと試みました。ここでこの講義のすべてを繰り返すつもりはありません。ただ、少なくとも、この非ヘレニズム化の新たな第二の波と第一の波の違いを、簡単に明らかにしたいと思えます。ハルナックの中心思想は、ただ人間イエスとその素朴なメッセージに戻ることでした。それが、あらゆる神学化とヘレニズム化の前提となるものだからです。この素朴なメッセージは、人類の宗教的発展の真の頂点を示します。イエスは、道徳のために礼拝を廃止しました。イエスは、最終的に、博愛的な道徳的教えの父として示されます。

こうしてハルナックが根本的にめざしたのは、キリスト教を再び近代精神と一致させることであり、そこから、キリスト教を、キリストの神性や、神の三一性への信仰とといった、その表面上の哲学的・神学的要素から解放することでした。その点で、ハルナックの考えでは、新約聖書の歴史的・批判的の積義は、神学をあらためて大学の宇宙の中に組み入れるものでした。ハルナックにとって、神学は本質的に歴史的なものであり、それゆえに厳密な意味で学問的なのです。イエスについて批判的にいいうることは、いわば実践理性の表現であり、だからこそ、それはまた、全体として大学内で正当化されるのです。

この背景にあるのは、近代的な理性の自己限定です。このことはカントの批判書の中で古典的なしかたで表現されましたが、その後、自然科学の思考によってさらに徹底的な形をとりました。簡単にいうなら、こうした近代的な理性概念は、科学技術の進歩によって強化された、プラトン主義（デカルト主義）と経験論の総合に基づいています。

一方で、ここで前提となっているのは、物質の数学的な構造、そのいわば内的な合理性です。この合理性により、物質の働きを理解し、物質を利用することが可能となります。このような根本的な前提が、近代の自然理解のいわばプラトン主義的な構成要素です。他方で、自然はわたしたちの目的に対して機能することができます。ここでは、実験における検証可能性ないし反証可能性のみが、決定的な確実性を示します。これら二つの両極の重点は、場合によって互いに入れ替わります。J・モノー（1910-76年）のようなきわめて実証主義的な思想家は、自分は筋金入りのプラトン主義者だと称しています。

このことは、わたしたちの問いかけにとって決定的に重要な、二つの根本的な方向づけを示します。まず、数学と経験の連関から生じる形の確実性のみが、科学的だということが許されます。科学たりうるためには、この基準に従わなければなりません。そこで、歴史学、心理学、社会学、哲学といった人文科学も、こうした科学性の規範と一致するように努めました。

わたしたちの考察にとって重要な、もう一つの点は、こうした方法論が、それ自体として、神への問いを排除することです。そして、神への問いは、非科学的ないし前科学的な問いとされます。したがって、ここでわたしたちは科学と理性の範囲の縮小に直面します。わたしたちはこのことを問題にしなければなりません²⁶。

神学を経験科学のような「科学」としようとするとき、キリスト教はますます貧しいものとなっていく。その一例が倫理の領域である。教皇は言う。

わたしたちは、さらにこういわなければなりません。これだけが科学であるなら、人間そのものも縮小されると。なぜなら、わたしたちの起源と目的に関する問いや、宗教や倫理の問いなどの、本来の人間に関する問いは、上述した「科学」によって規定された、共通の理性の範囲内に場を占めることができなくなり、主観的なものとされるからです。

そこから、人は、自分の経験に基づいて、自分が宗教的に耐えられると思われるものだけを選ぶことになり、主観的な「良心」が、個々の倫理的判断の最終的な判定者となります。しかし、こうして倫理と宗教は共同体を形成する力を失い、個人の恣意にゆだねられます。このような状態は人類にとって危険なものです。わたしたちはそれを、わ

26 教皇ベネディクト十六世「信仰、理性、大学——回顧と考察（2006年9月12日）」『靈的講話集2006』、268-272頁

たしたちを悩ませている宗教と倫理のさまざまな病理に見ることができます。こうした病理は、宗教や倫理に関する問いを理性が扱えないまでに、理性が縮小されたときに、生じてこざるをえないのです。進化の法則や心理学と社会学から倫理を打ち立てようとする試みは、何の役にも立ちません²⁷。

それゆえ、教皇は言う。

そのために、理性と信仰を新たなしかたで総合しなければなりません。人が自らに命じた、経験的に反証可能な領域への理性の限定を克服し、理性を広い空間に向けて再び開放しなければなりません。この意味で、神学は、たんなる歴史的・人文科学的学科としてではなく、本来の意味での神学として、すなわち、信仰の合理性への問いとして、大学に属し、諸科学の大きな対話に加わるのです²⁸。

なお、別の所で教皇は「キリスト教信仰は本質的に合理的・知的な側面をもっています。この側面を欠くなら、キリスト教信仰はキリスト教信仰でなくなります」²⁹とまで述べている。

『カトリック教会のカテキズム』「第1編 信仰宣言」を解説する連続講話の中でも、教皇は「信仰の合理性」というテーマの講話を行った。これは『カトリック教会のカテキズム』第1編第1部第1章に相当するが、実は『カトリック教会のカテキズム』に「信仰の合理性」という項目はない。したがって、これは教皇が強調する独自の内容である。

カトリックの伝統は初めからいわゆる信仰主義を拒絶してきました。信仰主義とは、理性に逆らって信じようと望むことです。「不条理なるがゆえにわれ信ず (Credo quia absurdum)」³⁰はカトリック信仰を説明する定式ではありません。実際に神は、神秘ではあっても、不条理なかたではありません。神秘は非合理でなく、むしろ意味、意義、真理の充満です。神秘を見つめることによって理性が暗闇を見いだすとしても、それは、神秘のうちに光がないからではなく、むしろそこに光がありすぎるからです。それは、人間が太陽を見ようとして直接に目を向けても、暗闇しか見えないのと同じです。しかし、太陽が明るくないという人はおらず、むしろ太陽は光の源なのです。信仰は神とい

27 同、272-273頁。

28 同、275頁。

29 教皇ベネディクト十六世「神学生への手紙 (2010年10月18日)」5、『司祭職』、135頁。

30 この言葉はテルトゥリアヌスの“credibile est, quia ineptum est” (De carne Christi 5.4)の誤引用として知られる。教皇もこれをテルトゥリアヌスの言葉として引用してはいない。

う「太陽」に目を向けることを可能にします。なぜなら、信仰は、歴史における神の啓示を受け入れることだからです。信仰は、さまざまな偉大な奇跡を認めることによって、いわば本当に神の神秘の輝きをことごとく受け入れます。神は人間に近づき、人間理性の被造的限界に応じて神を知ることが可能にします(第二バチカン公会議『神の啓示に関する教義憲章』13参照)。同時に神は、恵みによって理性を照らし、新たなはかりしれない無限の地平を開きます。だから信仰は、汲みつくすことのできない真理と存在を見いだすために、絶えず探究し、立ち止まることも沈黙することも促すのです。人間理性が信仰の教義(ドグマ)によって妨げられたかのように説く、一部の現代思想家の偏見は誤りです。カトリックの伝統の偉大な教師たちが示してきたとおり、事実はその反対です。聖アウグスティヌスは、回心の前、当時のあらゆる哲学者を通して真理をうむことなく探究しましたが、この哲学者たちがまったく不十分であると分かりました。アウグスティヌスにとって、合理的な探究の努力は、キリストの真理と出会うための意味のある教育課程でした。彼はいいます。「信じるために理解しなさい。そして理解するために信じなさい」(『説教43』: *Sermo* 43, 9, PL 38, 258)。これは彼自身が人生で体験したことを述べているかのように思われます。神の啓示に対して、知解と信仰は、無関係なものでも対立するものでもありません。むしろそれらはともに、啓示の意味を理解し、その真のメッセージを受け入れ、神秘の入り口に近づくための条件です。聖アウグスティヌスは、他の多くのキリスト教著作家とともに、信仰が理性とともに働くこと、信仰は考察し、考察へと招くことをあかししました。このような方向に従って、聖アンセルムス(Anselmus Cantuariensis 1033/1034-1109年)は『プロスロギオン』(*Proslogion*)で、カトリック信仰は「知解を求める信仰(*fides quaerens intellectum*)」であると述べます。知解を求めることは信仰の中で行われる行為なのです。とくにこの伝統をもっとも徹底した聖トマス・アクィナス(Thomas Aquinas 1224/1225-1274年)は、哲学者たちの理性に立ち向かい、それをキリスト教信仰の原理と真理に接ぎ木することによって、人間の思考に新たな合理的活力がもたらされることを示しました。

それゆえ、カトリック信仰は合理的であり、また人間理性への信頼を深めます³¹。

なお、(聖書学がもたらす)「信仰に反する見せかけの確信」にあらがい、聖書のうちにイエスの真の姿を見いだそうとして、教皇が教皇職の中で心血を注いで執筆したのが、その後2007年から2012年にかけて3冊に分けて発行した『ナザレのイエス』であった(後述2.)。

その意味で、「霊的遺言」は、教皇が、教皇職2年目の段階で、残された教皇職の中で伝えようとしたメッセージを凝縮したものだったと言える。

31 教皇ベネディクト十六世「一般謁見(2012年11月21日)、教皇ベネディクト十六世・教皇フランシスコ『信条(クレド)——教皇講話集』59-61頁。

1.2. 「信仰の合理性」とベネディクト十六世のカテケージス

以上で述べた「信仰の合理性」が、ベネディクト十六世のカテケージスの中でどのような形で具体的に示されているかを、いくつかの説教や講話の中に見ていきたい。以下で確認したいのは、次のことである。

(1) 『カトリック教会のカテキズム』では聖書・教理の説明がなされるが、それぞれの教理は決して自明ではなく、その「理解」が求められる。

(2) したがって、教皇は、教理、特に難解な教理について、「それはどういうことか」と問いかけ、聖書と伝統の中にその答えを見いだそうとする。その意味で教皇のカテケージスは「神学的」である。

小羊の血で洗って白くなる

今述べたような聖書または教理へのアプローチを、すでに教皇が少年の際に行っていることを示す一つのテキストをまず紹介したい。引用は2007年の「聖香油のミサ説教」である。

[……] 黙示録によれば、14万4千人の選ばれた人びとの衣が神にふさわしいものとされたのは、彼らのいさおしによるものではありません。黙示録は述べます。この人びとはその衣を小羊の血で洗いました。こうして彼らの衣は光のように真っ白になりました(黙示録7・14参照)。子どもの頃、わたしは疑問に思いました。「でも、何かを血で洗っても、けっして白くはならないではないか」。この疑問の答えはこうです。「小羊の血」は、十字架につけられたキリストの愛です。この愛が、わたしたちの汚れた服を白くします。この愛が、わたしたちの暗い心を真実なものとし、照らします。この愛が、どれほどわたしたちの暗闇が深くても、わたしたちを「主の光」へと造り変えます。アルバを着るとき、わたしたちは思い起こさなければなりません。すなわち、主はわたしのためにも苦しまれたのだということを。そして、主の愛がわたしのあらゆる罪よりも大きいがゆえに、初めてわたしは主の代わりを務め、主の光をあかすことができるのだと³²。

原罪とは何か³³

32 教皇ベネディクト十六世「聖香油のミサ説教(2007年4月5日)」『霊的講話集2007』、108頁。

33 「原罪」は『カトリック教会のカテキズム』396-409、『カトリック教会のカテキズム要約』75-78ほかで取り上げられる。「原罪が子孫に伝わっていくということは、わたしたちには十分に理解できない神秘です」(『カトリック教会のカテキズム』404、『カトリック教会のカテキズム要約』76参照)。ベネディクト十

次に取り上げたいのは、教皇が教皇職第一年の 2005 年、第二バチカン公会議閉会 40 周年記念ミサで行った説教である。「原罪」から守られるとはどういうことかについて、教皇は次のように述べる。

〔……〕けれども、今わたしたちは自らに問いかけてみなければなりません。「無原罪のマリア」とはどのような意味なのでしょう。この称号はわたしたちに何をいおうとしているのでしょうか。今日の典礼は、わたしたちに「無原罪のマリア」ということばの意味を、二つの姿を通して明らかにしています。

〔……〕もしわたしたちが、教会とともに信じ、祈りながら、このことばに耳を傾けるなら、わたしたちは、原罪とは何か、すなわち、伝えられた罪とは何か、また、この伝えられた罪から守られるとはどういうことか、あがないとはいかなることであるかを理解できるようになります。

この箇所はわたしたちにどのような状況を示そうとしているのでしょうか。

人間は神に信頼を置くことがありません。蛇の誘惑を受けて、人は、疑いを抱きます。結局、神は自分の人生から何かを取り上げるのではないだろうか。神はわれわれの自由を奪う敵なのではないだろうか。神を捨てることによって、初めてわれわれは完全な意味で自由になるのではないだろうか。要するに、神を捨てることによって、われわれは完全な意味で自由を実現できるのではないだろうか。

人間は疑いながら生きています。神の愛によってわれわれは神に従属することになったのではないだろうか。自分が完全な意味で自分であるためには、この従属から解放されなければならないのではないのか。人間は、自分の存在と、自分の人生の充足を、神から与えられることを望まないのです。

人間は、知識の木から、世界を形づくり、自分を神とする力を得て、自分を神のいる位置にまで高めることを望みます。また人間は、自分の努力で死と暗闇に打ち勝つ力を得ることを望みます。人間は愛を頼りにすることを望みません。愛は信用できないと考えるからです。人間はただ自分の知識だけを頼りにします。知識は自分に力を与えるからです。人間は愛よりも力に目を向けます。力によって、人間は自分の人生を自分で手に入れたいと願うからです。しかし、このようにして、人間は真理ではなく偽りを信じることになります。そこから、その人の人生は空虚と死のうちに沈んでいきます。

愛は従属ではありません。愛はたまものです。このたまものによって、わたしたちは生きます。人間の自由は、有限な存在としての自由です。だからこの自由は、それ自体、有限なものです。わたしたちは自由を共有することによって、すなわち自由の交わりを通して、初めてこの自由を手にすることができます。わたしたちが他者とともに、また他者のために正しいしかたで生きるとき、初めて自由は発展することができるのです。

六世は、教理省長官退任後は「原罪」について考察したいと考えていたという。

正しいしかたで生きるために、わたしたちはわたしたちの存在の真理に従って生きなければなりません。すなわち、神の意志に従って生きなければなりません。なぜなら、神の意志は、人間にとって、外から強制され、自分を束縛する法ではないからです。神の意志は、人間の本性の内的な基準です。この基準は、人間のうちに刻み込まれています。この基準が、人間を神の像とし、そこから人間を自由な被造物とするのです。

もしわたしたちが愛に逆らい、真理に反して――神に反して――生きるなら、わたしたちは互いに破壊し合い、世界を破壊することになります。そのときわたしたちはいのちを失い、わたしたちのわざは死のために行われることになります。今述べたことがすべて、人祖の墮罪と地上の樂園からの追放の物語という、不滅のたとえによって語られているのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。自分自身とわたしたちの歴史を真剣に顧みるなら、わたしたちはこういわずにしなければなりません。この物語は、初めの頃の歴史だけでなく、あらゆる時代の歴史を語っているのだと。また、わたしたちも皆、自分の中に、創世記のたとえ話に示された、あの考え方の毒を、わずかながらもっているのだと。

わたしたちはこのわずかな毒を「原罪」と呼んでいます。まさにこの無原罪の聖マリアの祭日にあたって、わたしたちは密かにこう疑っています。罪を犯さないような人は、根本的に退屈で、その人の人生には何か欠けているのではないだろうか。この欠けている何かとは、自律した人間の劇的なあり方のことです。「いいえ」という自由、罪の暗い側面に落ちていく自由、何かを自分とする自由は、真の意味で人間であることの一部ではないのか。このような自由によって、わたしたちは初めて、男であり、女であり、真の意味で自分自身であることの幅と深みをとことん追求することができるのでないか。わたしたちは、現実には完全な意味で自分自身となるために、神に逆らっても、このような自由を試してみるべきではないのかと。

一言でいえば、わたしたちは、悪いことは根本的には善いことだと考えています。わたしたちは、充実した人生を経験するために、少なくとも少くくは、悪が必要だと考えています。わたしたちは、誘惑者メフィストフェレスが正しいと考えています。メフィストフェレスはこういうからです。自分は「常に悪を欲して、しかも常に善を成す」あの力であると（J・W・フォン・ゲーテ『ファウスト』第1部3〔相良守峯訳、岩波書店、1958年、92頁〕）。わたしたちは、悪と多少の取引をして、神に逆らう小さな自由を自分に残しておくことが、基本的に善いことで、もしかすると必要でさえあると考えています。

しかし、わたしたちが周りの世界に目を向けるなら、そうではないことがわかります。いいかえると、悪は常に有害です。悪は人間を高めるところか、人間を貶（おとし）め、辱（はずかし）めます。悪は少しも人間を偉大なものにも、清いものにも、富めるものにもしません。かえって、悪は人間を傷つけ、いっそうつまらないものとするのです。

無原罪の聖マリアの祭日にあたって、わたしたちが少しでも学ばなければならない

のは、このことです。神に自分を完全にささげる人は、神の操り人形になるのでも、素直なだけの退屈な人になるのでもありません。神に自分を完全に委ねる人が、自分の自由を失うことはありません。自分を神に完全に委ねた人だけが、真の意味での自由を見いだします。善を行う自由のもつ、偉大で創造的な、はかり知れない大きさを見いだすのです。

神に向かう人は、小さくなるどころか、いっそう偉大な者となっていきます。なぜなら、その人は、神によって、神とともに、偉大な者となり、神的な者となり、真の意味で自分自身になるからです。神の手に自分を委ねる人は、他の人から遠ざかり、自分の救いだけを考えたりはしません。反対に、神の手に身を委ねて初めて、その人の心は真の意味で目覚めます。そして、研ぎ澄まされた心を持ち、寛大で開かれた人格となるのです³⁴。

ここで取り上げられる「自由と隷属」というテーマは『ナザレのイエス』第一巻でも「失われた息子と家に留まった息子」の譬えに関する考察で取り上げられることになる³⁵。また、「悪」の問題は、教皇が退任までに行った説教・講話で繰り返し考察する中心的なテーマとなる³⁶。

聖霊とはいかなるかたか³⁷

教皇はワールドユースデー（WYD）を3回主宰したが（2005年ケルン、2008年シドニー、2011年マドリード）、2番目のシドニー大会のテーマは「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒言行録1・8）であった。さて、「聖霊」とはいかなるかたか。シドニー大会「前晩の祈りの講話」で、教皇は正面からこの問いを取り上げる。聖霊を理解するためにアウグスティヌスを研究したことを振り返る。「大きくなると、わたしは神が父と子であること——これらの名はすでに相当の意味をもっていましたので——はある程度わかるようになりましたが、三位一体の第三の位格についての理解は不完全なままでした。そこで、若い司祭として神学を教えていたとき、わたしは教会史における聖霊に関する優れた証人たちを研究しようと決意しました。この研究の歩みの中で、わたしは何よりも偉大な聖アウグ

34 教皇ベネディクト十六世「第二バチカン公会議閉会20周年記念ミサ説教（2005年12月8日）」『霊的講話集2005』234-241頁。

35 『ナザレのイエス』、265-266頁参照。

36 拙稿「教皇ベネディクト十六世の平和の神学」147頁以下参照。

37 「聖霊」については『カトリック教会のカテキズム』683-690、『カトリック教会のカテキズム要約』136-137参照。

スティヌスを読みました」³⁸。

友人の皆様。信条を唱えるとき、わたしたちはこういいます。「わたしは信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を」。「造り主である聖霊」は、すべての被造物にいのちを与える神の力であり、キリストと結ばれた新しい豊かないのちの源です。聖霊は、主と一致し、使徒の聖伝に忠実に従うことができるように教会を支えます。聖霊は聖書に靈感を与え、神の民を完全な真理にまで導きます（ヨハネ 16・13 参照）。これらすべての意味で聖霊は「いのちの与え主」であり、わたしたちを神のみ心にまで導きます。ですから、聖霊に方向づけていただければいただくほど、わたしたちはより完全しかたでキリストに似たものとなり、より深く三位一体の神のいのちと一致するようになります。〔……〕

ある意味で聖霊は、聖なる三位一体の中であまり顧みられることのないかたです。聖霊をはっきりと理解することは、わたしたちの力をほとんど超えているように思われます。しかし、わたしが小さな子どもだったとき、両親は、皆様のご両親と同じように、わたしに十字架のしるしを教えてくださいました。そこでわたしはすぐに、三つのペルソナ（位格）のうち唯一の神がおられること、そして、三位一体はわたしたちのキリスト教信仰と生活の中心だということを知りました。大きくなると、わたしは神が父と子であること——これらの名はすでに相当の意味をもっていましたので——はある程度わかるようになりましたが、三位一体の第三の位格についての理解は不完全なままでした。そこで、若い司祭として神学を教えていたとき、わたしは教会史における聖霊に関する優れた証人たちを研究しようと決意しました。この研究の歩みの中で、わたしは何よりも偉大な聖アウグスティヌスを読みました。

アウグスティヌスの聖霊理解は少しずつ発展しました。それは一つの戦いでした。青年のとき、アウグスティヌスはマニ教を信じました。マニ教は、わたしがすでに述べた、霊的なことがらを肉体的なことがらから徹底的に分離して、霊的なユートピアを造ろうとする試みの一つです。そのためアウグスティヌスは最初、神が人となったというキリスト教の教えに疑いを抱きました。しかしアウグスティヌスは、教会の中に神の愛があることを経験することによって、この愛の源泉を三位一体の神のいのちのうちに探究するようになりました。そこからアウグスティヌスは、聖なる三位一体における一致のきずなである聖霊に関する、三つの特別な洞察へと導かれました。すなわち、交わりとしての一致、とどまる愛としての一致、そして、与え、与えられたたまものとしての一致です。この三つの洞察はたんなる理論的な洞察ではありません。それは聖霊がどのようにわざを行われるかを説明してくれます。個人も共同体もしばしば一致と団結の

38 教皇ベネディクト十六世「WYD シドニー大会前晩の祈り講話(2008年7月19日)』『霊的講話集2008』、196頁。

不在によって苦しんでいる世界において、これらの洞察は、わたしたちが聖霊と一致し続け、自分たちがあかししようとする領域を広め、照らすための助けとなります。

そこで、アウグスティヌスの助けによって、聖霊のわざについて少しでも明らかにしてみたいと思います。アウグスティヌスは、「聖」と「霊」という二つのことばが神の神性を表しているといいます。いいかえると、この二つのことばは、父と子が共有するもの、すなわち父と子の「交わり」を表します。聖霊の際立った特徴は、父と子が「共有する」ものであるところにあります。そこからアウグスティヌスは、聖霊の特別な性質は「一致」であると結論づけます。この「一致」は、生きた交わりの一致です。すなわち、絶えず与え合う関係にあるペルソナどうしの一致です。父と子は互いに自らを与え合うからです。思うに、わたしたちは、このように一致、交わりとして聖霊を理解することがどれほどわたしたちを照らしてくれるかを、かいま見始めます。他の人格が同じ尊厳をもつことを否定する関係を、真の一致の基盤とすることは決してできません。一致は、さまざまな集団のたんなる総和でもありません。わたしたちはときとしてこのような集団の総和によって自分を「定義」しようと試みるのですが、実際、交わりを生きることによって初めて、一致は支えられ、人間にふさわしいあり方が完全に実現します。すなわち、わたしたちは、皆が神を必要としていることを認めます。ともにいて一致をもたらす聖霊にこたえます。そして、互いに奉仕し、自分を与え合います。

アウグスティヌスの第二の洞察——すなわち、聖霊はとどまる愛であるということ——は、聖ヨハネの手紙——を研究することから生まれました。ヨハネは「神は愛です」（一ヨハネ 4・16）といいます。アウグスティヌスはこう考えます。このことばは三位一体全体について述べているものの、聖霊の特別な性格を表します。愛の永続的な性格を考察しながら——「愛にとどまる人は、神のうちにとどまり、神もその人うちにとどまってください」（同）——、アウグスティヌスは問いかけます。とどまらせてくださるのは、愛でしょうか、それとも聖霊でしょうか。アウグスティヌスが到達した結論はこれです。「聖霊がわたしたちを神のうちにとどませ、神をわたしたちのうちにとどませるのです。ところでこのようにするものは愛です。それゆえ、聖霊は愛である神です」（『三位一体論』： *De Trinitate* 15, 17, 31〔加藤信朗・上村直樹訳、上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999年、1043頁。ただし表記・表現を一部改めた〕）。これはすばらしい説明です。神は聖霊によって、愛であるご自分を分け与えます。この洞察からこれ以上のどんな理解を得ることができるでしょうか。愛は、聖霊がともにいてくださることのしるしです。愛を欠いた考えやことばは——たとえそれがどんなに洗練され、知恵に満ちたものであっても——「霊からの」ものではありません。さらに愛は特別な特徴をもっています。愛は甘いものでもなければ、気まぐれなものでもありません。愛には果たすべき使命ないし役割があります。つまり、とどまるということです。愛は本来、永続的なものです。親愛なる友人の皆様。ここでもわたしたちは、聖霊がどれほど多くのものを現代世界にもた

らしてくれるかをさらにかいま見ます。すなわちそれは、不安を消し去る愛です。裏切りへの恐れに打ち勝つ愛です。永遠をもたらす愛です。いつまでもとどまる一致へとわたしたちを引き寄せる真実の愛です。

アウグスティヌスは第三の洞察——すなわち、聖霊はたまものであるということ——を、わたしたち皆が知り、愛している福音の箇所から得ました。すなわち、井戸のそばでキリストがサマリアの女と行った対話です。この箇所でイエスは、ご自分が生きた水を与える者であることを現します（ヨハネ 4・10 参照）。後にこの生きた水は聖霊であることが明らかにされます（ヨハネ 7・39、一コリント 12・13 参照）。霊は「神のたまもの」（ヨハネ 4・10）であり、うちなる泉です（ヨハネ 4・14 参照）。この霊がわたしたちの奥底からの渇きをいやし、わたしたちを父へと導きます。このような考察から、アウグスティヌスは次のように結論づけます。ご自身をたまものとしてわたしたちに分け与える神は、聖霊です（『三位一体論』： *De Trinitate* 15, 18, 32 参照）。友人の皆様。ここでもわたしたちは、三位一体のわざをかいま見ます。聖霊はご自身を永遠に与え続ける神です。尽きることのない泉のように、聖霊はご自身そのものを注ぎ出すのです。このような絶えることのないたまものを目にするなら、すべての消え去るものもつ限界、消費主義的な考え方の愚かしさがわかるようになります。なぜ、目新しいものを捜し求めても、いつまでも満たされず、渇いたままであるかがわかるようになります。わたしたちは永遠のたまものを、すなわち、なくなることのない泉を捜し求めているのではないのでしょうか。サマリアの女とともに叫ぼうではありませんか。渇くことがないように、その水をください（ヨハネ 4・15 参照）。

親愛なる若者の皆様。イエス・キリストを信じる人々のすばらしい交わりをもたらしてくださるのは聖霊であることがわかりました。与え主であるとともにたまものであるというご自分の本性に従って、聖霊は今も皆様を通して働き続けておられます。聖アウグスティヌスの洞察に力づけられながら、わたしはいいます。「一致をもたらす愛」を皆様の基準としてください。「とどまる愛」を皆様の課題としてください。「自分を与える愛」を皆様の使命としてください³⁹。

死の門について⁴⁰

死は人間が極めつくすことのできない神秘である。次に引用するのは、2007年の復活徹夜祭ミサ説教である。「キリストの十字架は、死の門を、破られることのない門を、大きく開きます。死の門はもはや乗り越えられないものではなくなりました。キリストの十字架が、キリストの徹底的な愛が、この門を開く鍵だからです。神でありながら、死ぬ

39 同、194-200 頁。

40 「キリストは死者のもとに下られた」については『カトリック教会のカテキズム』632-638、『カトリック教会のカテキズム要約』125 参照。

ために人となったかたの愛——この愛が、死の門を開くことができるからです」⁴¹という表現は、ユニークな象徴的説明であるが、決して理解不能なものではない。

聖土曜日の夜にもう一度戻りたいと思います。わたしたちは「信仰宣言」の中で、キリストの歩みについて、キリストが「陰府に下った」と唱えます。何がそのとき起こったのでしょうか。わたしたちは死の世界のことがわかりません。だからわたしたちは、想像を通して、このキリストが死に打ち勝った次第を思い描くほかありません。この想像は常に不十分なものであり続けます。しかし、不十分ではあっても、想像はわたしたちが神秘の一部を理解するための助けとなります。典礼は、イエスが死の夜に降ったことについて、詩編 24 のことばを使って述べます。「城門よ、頭（あたま）を上げよ、としえの門よ、身を起こせ」（詩編 24・7）。死の門は閉じられ、だれもそこから帰ることはできません。この鋼鉄の扉を開ける鍵はありません。しかし、キリストはその鍵をもっておられます。キリストの十字架は、死の門を、破られることのなかった門を、大きく開きます。死の門はもはや乗り越えられないものではなくなりました。キリストの十字架が、キリストの徹底的な愛が、この門を開く鍵だからです。神でありながら、死ぬために人となったかたの愛——この愛が、死の門を開くことができるからです。この愛が死よりも強いからです。東方教会の復活祭のイコンは、キリストが死の世界に入る様子を描いています。キリストは光の衣をまっています。神は光だからです。「夜は昼のように輝き、闇も、光も、変わるところがない」（詩編 139・12 参照）。死の世界に入ったイエスには、聖なる傷跡がついています。イエスの傷、すなわちイエスの苦しみには力があります。それは死に打ち勝つ愛だからです。イエスは、死の夜の中で待っていた、アダムを初めとするすべての人びとと出会います。この人びとを見ると、ヨナの祈りを耳にしているように感じます。「陰府の底から、助けを求めると、わたしの声を聞いてくださった」（ヨナ 2・3）。神の子は、受肉によって、人間、すなわちアダムと同じものとなりました。しかし神の子は、死の夜に降ることによって最高の愛を成し遂げられたこのとき、初めて受肉の旅路を完成しました。神の子は、自分が死ぬことによって、アダムや自分を待ち望んでいたすべての人びとの手を取り、彼らを光に導いたからです。

けれどもわたしたちはこう問いかけることができます。このようなイメージは何を意味するのでしょうか。キリストによって行われたことのほんとうの新しさは何だったのでしょうか。人間の霊魂は不滅のものとして創造されました。キリストはどのような新しいことをもたらしたのでしょうか。霊魂はたしかに不滅です。人間は、死んだ後も、独自のしかたで神の心にとめられ、愛され続けるからです。しかし人間は、自分の力で神のところまで昇ることができません。わたしたちは神の高みにまで自分を運ぶ

41 教皇ベネディクト十六世「復活徹夜祭ミサ説教（2007年4月7日）」『靈的講話集 2007』、125頁。

翼をもっていません。けれども、神とともにいることのほかに、人間を永遠に満たしてくれるものはありません。永遠に神と一致することができないなら、それこそが罰となります。人間は、高みに昇ることができないにもかかわらず、この高みにあこがれています。「わたしは深い淵からあなたに叫びます……」。わたしたちを神との一致にまで導くことのできるかた、自分の力では達することのできないところにまで導くことのできるかたは、復活したキリストだけです。まことに復活したキリストは、見失った羊をその肩に担ぎ、家に連れて帰ります。復活したキリストのからだにつかまることによって、わたしたちは生きています。復活したキリストのからだをいただくことによって、わたしたちは神のみ心に達します。このようにして初めて、わたしたちは死に打ち勝ち、自由なものとなされ、自分のいのちを希望とすることができるのです。

これこそが復活徹夜祭の喜びです。すなわち、わたしたちは自由です。イエスの復活によって、愛は死よりも強いことが、愛は悪よりも強いことが示されました。キリストは愛によって降りました。そしてキリストは、愛の力によって昇りました。この愛の力によって、わたしたちはキリストへと導かれます。キリストの愛と一つに結ばれ、愛の翼に乗り、愛の人として、キリストとともに世の闇に降ろうではありませんか。わたしたちは、こうすればわたしたちもキリストとともに高く上げられることを知っているからです。それゆえ、この夜にあたって祈りたいと思います。主よ、今日もわたしたちに示してください。愛は憎しみよりも強いことを。愛は死よりも強いことを。どうか現代の夜にも、現代の淵の底にも降ってください。あなたを待ち望む人を見手でとらえてください。彼らを光へと導いてください。わたしが暗夜にいるときにも、わたしとともにいて、わたしを闇の外に導いてください。わたしを助けてください。わたしたちを助けてください。あなたを待ち望み、深い淵からあなたに叫ぶすべての人びとのいる暗闇に、わたしたちがあなたとともに降りていくことができるように。わたしたちを助けてください。わたしたちが彼らに光をもたらすことができるように。わたしたちを助けてください。わたしたちが愛を受け入れることができるように。この愛によって、わたしたちはあなたとともに降り、そこから、あなたとともに上げられるからです。アレルヤ。アーメン⁴²。

悪について⁴³

すでに指摘したとおり⁴⁴、ベネディクト十六世の教皇職にとって、「悪」の問題は中心的なテーマだったと考えられる。悪の問題を正面から取り上げたテキストとして、ここでは

42 同、124-128頁。

43 悪については、『カトリック教会のカテキズム』309-324、『カトリック教会のカテキズム要約』57-58参照。

44 前注36参照。

次の二つを引用したい。

最初のもは、2011年、3・11東日本大震災の直後、聖金曜日の4月22日（金）に放映された「イエスについて」からの引用である。「イエスについて」は午後2時10分からRAI（イタリア放送協会）がテレビ番組「A sua imagine」で放映された。この番組の中で、教皇は7つの質問に答えているが、引用するのは最初の質問とその答えである。ローマ教皇がこのような形でテレビ番組の中で質問に答えるのは初めてのことであった。震災における苦しみという、「答えることができない問い」に対して、教皇は「神が愛であること」⁴⁵を唯一の答えとして示している。

質問者 [……] 第一の質問は、まさにこの罪のない者の苦しみというテーマに関するものです。質問は日本の7歳の少女から寄せられました。少女はいいます。「わたしの名前はエレナです。日本人で7歳です。今わたしはとっても怖いです。大丈夫だと思っていたわたしのお家がとっても揺れたり、わたしと同じ年くらいの子どもがたくさん死んだり、お外の公園に遊びに行けないからです。なんで子どももこんなに悲しいことにならなければいけないのですか。神さまとお話ができるポープ、教えてください」。

教皇 親愛なるエレナさん。心からごあいさつ申し上げます。わたしも同じように問いかけています。どうしてこのようなことが起きるのでしょうか。ほかの人々は快適に暮らしているのに、どうして皆さんがこれほど苦しまなければならないのでしょうか。わたしには答えることができません。けれども、わたしは知っています。イエスは、罪がないにもかかわらず、わたしたちと同じように苦しまれました。イエスのうちにご自身を現してくださったまことの神は、皆さんのそばにいてくださいます。このことはとても大切なことだと思います——たとえ答えが見つからず、わたしたちが今なお悲しみのうちにあっても。神は皆さんのそばにいてくださいます。そして、それが皆さんの助けになることは確かです。いつの日か、どうしてこのようなことが起きたのか分かるようになるかもしれません。今は、皆さんが次のことを知るのが大切だと思います。「神はわたしを愛しておられます」。たとえ神がわたしのことを知らないように見えても。決してそんなことはありません。神はわたしを愛しておられます。神はわたしのそばにいてくださいます。次のことも信じなければなりません。世界中の、全世界の多くの人が皆さんとともにいてくれます。皆さんのことを思い、皆さんのため、皆さんを助けるためにできることをしてくれています。そして、どうか次のことを知ってください。いつの日か分かるでしょう。この苦しみが空しく、無駄ではなかったことを。この苦しみ

45 教皇の最初の回勅『神は愛（2005年12月25日）』参照。教皇はP・ゼーヴァルトが行った最後のインタビューの中でも「自分が好きな回勅はどれかと問われれば、それは恐らく最初の回勅である『神は愛』だ」と述べている。拙稿「書評 ベネディクト十六世／ペーター・ゼーヴァルト『最後の対話』」『上智大学キリスト教文化研究所紀要』38（2020年）、88頁参照。

の向こうには、いつくしみの計画が、愛の計画があることを。それは偶然起こったのではありません。このことを信じてください。わたしはあなたとともにいます。苦しむ日本子どもたちとともにいます。わたしは祈りと行いによって皆さんを助けたいと思います。どうか信じてください。神が皆さんを助けてくださいます。ですから、ともに祈りたいと思います。皆さんが一日も早く光を見いだすことができますように⁴⁶。

もう一つは、2006年にアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所を訪問した際に行った演説である。ここでも3・11東日本大震災と同じように、人間が行う悪に対する「神の沈黙」について問いかける。そしてこの問いに、教皇は「愛といつくしみをもった理性」を備えた神への訴えをもって答えている。

〔……〕この地ではどれだけ多くの問いが生まれることでしょうか。いつも新たな問いが生まれます。あの日々の間、神はどこにおられたのでしょうか。なぜ神は沈黙しておられたのでしょうか。どうして神はこの際限のない絶滅と、悪の勝利を許すことができたのでしょうか。詩編44のことばが思い起こされます。それは苦しみに対するイスラエルの嘆きを述べています。「あなたはそれでもわれらを打ちのめし、山犬の住みかに捨て、死の陰で覆ってしまいました。……われらはあなたゆえに、絶えることなく殺される者となり、屠るための羊とみなされています。主よ、奮い立ってください。なぜ、眠っておられるのですか。永久にわれらを突き放しておくことなく、目覚めてください。なぜ、み顔を隠しておられるのですか。われらが貧しく、虐げられていることを忘れてしまわれたのですか。われらの魂は塵に伏し、腹は地に着いたままです。立ち上がって、われらをお助けください。われらをあがない、あなたのいつくしみを表してください」（詩編44・20、23-27）。

イスラエルが深い悩みのときに、苦しみながら神に上げた、この苦悩の叫びは、あらゆる時代に――昨日も、今日も、また明日も――、神への愛のゆえに、真理と善への愛のゆえに苦しむすべての人が、助けを求めて上げる叫びでもあります。現代にあっても、このように苦しむ人がどれほど多いことでしょうか。

わたしたちは、神の神秘に満ちた計画を探ることができません。わたしたちはただその一部を垣間見ることしかできません。わたしたちが自分を神と歴史の審判者にしようとするなら、それは誤りです。そのようなことをするなら、わたしたちは人間を守るどころか、人間の滅びを招きます。そうです。すべてのことを言い尽くし、行い尽くしたときも、わたしたちは謙遜な心で、しかし粘り強く、神に叫び続けなければなりません。目覚めてください。あなたの造られた人類を忘れないでくださいと。

そして、わたしたちが神に上げる叫びは、わたしたち自身の心をも貫く叫びとならな

46 教皇ベネディクト十六世「イエスについて」『霊的講話集 2011』、134-136頁。

ければなりません。わたしたちの内に、神の隠れた現存を呼び覚ます叫びとならなければなりません。それは、神の力が、すなわち、神がわたしたちの心に植えてくださった力が、利己心や臆病や無関心や日和見主義の泥で、わたしたちの中に埋もれて、出てこれないようなことがないようにするためです。

心の限り、神に叫び声を上げようではありませんか。新たな災いがわたしたちに降りかかり、あらゆる闇の力が人間の心から新たに立ち現れてきたように思われる、今このときに。あるところでは、罪のない人に無意味な暴力を振るうことを正当化するための手段として、神の名が濫用されているからです。また、あるところでは、冷酷な思想が、神を認めず、神への信仰を笑いものにしてしているからです。

神に叫び声を上げようではありませんか。神が人びとを回心へと導き、暴力は平和をもたらすものではなく、さらなる暴力を生み出すだけであることを悟るように人びとを助けてくださいと。破壊の連鎖の中では、最終的にすべての人が敗者となるからです。

わたしたちが信じる神は、理性を備えた神です。もちろんこの理性は、宇宙に関して中立的な態度をとる数学のような理性ではありません。それは愛といつくしみをもった理性です。わたしたちは神に祈り、また人類に呼びかけます。どうかこの理性が——すなわち、愛の論理が、和解と平和の力を認めることが、非合理主義や、神から切り離された偽りの理性がもたらす脅威に打ち勝ちますように。〔……〕⁴⁷

イエスの受難の意味への問い⁴⁸

悪の問題は、イエスの受難の意味への問いへと収斂する。2008年の「お告げの祈り」で、教皇は次の叫びにも近い考察を行っている。

〔……〕神の子がわたしたちを救うために苦しみを受け、十字架につけられて死ななければならなかったとしても、それが天の父の残酷な計画のためでなかったことは明らかです。神の子が死ななければならなかった理由は、彼がわたしたちをいやさなければならぬ病が重かったためです。悪がそれほど深刻かつ致命的なものだったからです。そのために悪は神の子のすべての血を求めます。実際、イエスはご自分の死と復活によって罪と死に打ち勝ち、神の支配を回復しました。しかし、戦いは終わっていません。悪は今も存在します。そして、現代も含めて、あらゆる時代に反抗します。戦争の恐怖、罪のない人々に加えられる暴力、無力な人々を苦しめる貧困と不正——もしこれらが神の支配に対する悪の反抗でないならば、それらはいったい何なのでしょう。そ

47 教皇ベネディクト十六世「アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所での演説（2006年5月28日）」『靈的講話集 2006』、182-184頁。

48 イエスの受難の苦しみの意味については、『カトリック教会のカテキズム』595-623、『カトリック教会のカテキズム要約』117-119参照。

して、憎しみに打ち勝つ愛、すなわち死を恐れないうちの無防備な力による以外に、どのようにしてこのような悪行に対抗することができるでしょうか。理解されず、多くの弟子から見放されながら、イエスはこの不思議な力を用いました⁴⁹。

当時、講演者はこの「お告げの祈り」をインターネット中継で見れていたが、「神の子が死ななければならなかった理由は (La causa è)」と述べた後、教皇がしばらく絶句したことを覚えている。それは、教皇自身が「深刻かつ致命的な悪」を目の当たりにしていたからだと思われる。だからこそ教皇は、パスカル (1633-62 年) が述べた次の言葉にも共感するのである。

[……] キリストの死は、あらゆる時代の人類を苦しめる、多くの苦難と悪を思い起こさせます。すなわち、自分の死のもたらす重圧。今日も大地を血で染める憎しみと暴力です。主の受難は、人々の苦しみの中で続きます。ブレーズ・パスカルが適切にもいうとおりです。「イエスは世の終わりまで苦悶されるであろう。そのあいだ、われわれは眠ってはならない」(『パンセ』: *Pensées*, 553) ⁵⁰。

2. 『ナザレのイエス』と『イエスの祈り』

2.1. 問題の所在

2009 年に全司教に向けて書いた手紙の中で、教皇はこう述べている。

わたしたちの歴史の現時点の真の問題は、神が人間の視野から消えつつあるということです。そして、神からの光が弱まるにつれて、人類が方向づけを失い、それがますますはつきりとした破壊的な結果をもたらしているということです。

人々を神へと導くこと。聖書の中で語る神へと導くこと。これが、現代の教会とペトロの後継者の究極的、根本的な優先課題です⁵¹。

教皇は第二バチカン公会議において『神の啓示に関する教義憲章』(*Dei Verbum*) 作成に

49 教皇ベネディクト十六世「お告げの祈り (2008 年 8 月 31 日)」『靈的講話集 2008』、242-243 頁。

50 教皇ベネディクト十六世「一般謁見 (2009 年 4 月 8 日)」『靈的講話集 2009』、100 頁。『パンセ』の引用は前田陽一・由木康訳、中央公論社、1966 年、277 頁による。拙稿「ベネディクト十六世の平和の神学」『カトリック研究』第 82 号 (2013 年)、147-148 頁参照。

51 教皇ベネディクト十六世「全司教への手紙 (2009 年 3 月 10 日)」、邦訳、『現代カトリシズムの公共性』、185 頁。

関わった⁵²。2005年の『神の啓示に関する教義憲章』発布40周年記念国際会議参加者へのあいさつの中で、教会生活における聖書の重要性について次のように指摘していた。

公会議は、教会がいかなるものであるかを指摘しています。すなわち、教会とは、神のことばを聞き、のべ伝える共同体なのです。教会は、自分だけで生きることにはできません。教会は福音によって生きています。また、教会は、自らが歩いていく方向を、福音のうちに、常に、そして新たに見いだします。あらゆるキリスト信者は、次のことを肝に銘じ、また、自らにあてはめなければなりません。まずみことばを聞く者が、みことばを告げ知らせる者となりうるのです⁵³。

2008年10月に開催された、ベネディクト十六世主宰の2回目となるシノドスは「教会生活と宣教における神のことば」をテーマとして取り上げた。これも異例なことであったが、教皇は会議の中で自ら発表者の一人として予定外の発表を行った。短い発表の中で教皇が指摘したのは次のことである。『神の啓示に関する教義憲章』は聖書解釈の二つの方法として、「歴史的・批判的方法」と「神学的積義」が必要であることを確認した。

[……]わたしはイエスに関する著作(『ナザレのイエス』)を執筆することによって、現代の積義がもたらしてくれる利点を広く知ることができたと同時に、問題点と危険も知ることができました。『神の啓示に関する教義憲章』12は、適切な積義を行うための二つの方法論的な指針を与えています。第一に、同文書は歴史的・批判的な方法の使用の必要性を確認します。これについて同文書は本質的な要素について簡単に述べています。この必要性はヨハネ1・14で定式化されたキリスト教の原則に基づきます。「ことばは肉となった(Verbum caro factum est)」。歴史的事実はキリスト教信仰を構成する不可欠な側面です。救いの歴史は神話ではなく、真の歴史です。それゆえそれは、真剣な歴史的探究方法によって研究されなければなりません。

しかしながら、救いの歴史はもう一つの側面をもっています。すなわち、それが神のわざだという側面です。そのため『神の啓示に関する教義憲章』は、みことばを正しく解釈するために必要な第二の方法論的側面について述べます⁵⁴。みことばは人間のこ

52 このことに関して、教皇が退位直前に行った講演「第二バチカン公会議をよみがえらせる——一人の証人の回顧と希望(2013年2月14日)」『霊的講話集2012・2013』、394-418頁、特に408頁以下参照。「講話は46分にわたり事前に用意した原稿なしに行われた」(同、418頁)。

53 教皇ベネディクト十六世『神の啓示に関する教義憲章』発布40周年国際会議参加者へのあいさつ(2005年9月16日)『霊的講話集2005』、129頁。

54 「ところで、神は聖書の中で人間を通して人間の方式で語ったので、聖書の解釈者は、神が何をわれわれに伝えようと欲したのかを見極めるためには、聖書記者たちが実際に何を表現しようとしたのか、

とばであると同時に、神のことばだからです。あらゆる文学テキストの解釈の根本的な原則に従って、公会議はいいます。聖書は、それによって聖書が書かれたのと同じ霊によって解釈しなければなりません。そこから公会議は、聖書の神的・霊的側面を適切に考慮するのに役立つ三つの根本的な方法論的要素を指摘します。すなわち、(一) 聖書全体の統一性を考慮しながらテキストを解釈しなければなりません。現代ではこれは正典的積義と呼ばれます。公会議の時代にこの用語はまだ存在していませんでしたが、公会議は同じ意味のことを述べています。すなわち、聖書全体の統一性を考慮に入れなければならないということです。(二) 教会全体の生きた伝統を考慮しなければなりません。そして最後に(三) 信仰の類比を考えなければなりません。歴史的・批判的方法と、神学的方法という、この二つの方法論的なレベルを考慮したときに初めて、神学的積義について語るができます。これが聖書に適した積義です。第一のレベルにおいて、現代の学問的積義はきわめて高度なレベルで行われ、実際に役立っています。しかし、同じことをもう一つのレベルについていうことはできません。『神の啓示に関する教義憲章』が述べた三つの神学的要素を含んだ第二の方法論的レベルが存在しないように思われることもしばしばです。このことはきわめて深刻な帰結をもたらします。

第二の方法論的レベルの不在がもたらす第一の帰結は、聖書が単なる過去についての書物となるということです。そこから道徳的な帰結が生じる場合があります。たとえ

神が彼らのことばによって何を明らかにしようと望んだのかを、注意深く研究しなければならない。

聖書記者たちの意図を理解するためには、とりわけ「文学類型」をも考慮しなければならない。

なぜなら、さまざまに異なる歴史書、あるいは預言書ないし詩文学、あるいはその他の文学類型において、真理はそれぞれ異なるしかたで提示され、表現されているからである。

したがって、聖書を解釈する者は、聖書記者が一定の状況の中で彼の時代と文化の条件のもとで、当時用いられていた文学類型で表現しようと意図して表現した意味を探究する必要がある。聖なる著者が書いて主張しようとしたことを正しく理解するためには、聖書記者の時代に流布していた、自然で通常の思考法、表現法、物語法にも、また当時人々の交流の中で広く慣用となっていた方法にも、ふさわしい注意を払わなければならないからである。

しかし、聖書はそれが書かれたのと同一の霊において読まれかつ解釈されなければならないから、聖なる本文の意味を正しく理解するためには、教会の生きた聖伝全体と信仰の類比を考慮に入れながら、聖書全体の内容と統一性にも同等の注意を払わなければならない。こうした諸規則に従って聖書の意味をより深く理解し説明するために努力することは聖書積義学者の任務であるが、それもまさにこの予備的研究によって教会の判断が熟するためなのである。というのは、聖書の解釈のしかたに関するあらゆることは最終的には教会の判断のもとにあり、教会こそが神のことばを保ち解釈する権限と任務を神から受けて行使するからである。」(『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』カトリック中央協議会、2013年、404-405頁)

歴史を学ぶことができても、そのような書物は過去について語るにすぎません。そして、積義はもはや真の意味での神学的積義ではなく、純粹に資料批判的・文学批判的な積義となります。これが第一の帰結です。つまり、聖書が過去にとどまり、過去についてだけ語るということです。第二の帰結はさらに重大です。『神の啓示に関する教義憲章』に示された信仰の解釈学が消えると、必然的にもう一つの種類の解釈学が現れてきます。すなわち、世俗的、実証主義的な解釈学です。この解釈学の根本的な要素は、神的なものが人間の歴史に現れることはないという確信です。この解釈学によればこうなります。もしも神的な要素があるように思われたなら、そのような印象がどこから来るのかを説明しなければなりません。そして、すべてを人間的な要素に還元しなければなりません。そこから、神的な要素の歴史性を否定する解釈が生まれます。たとえば、現代ドイツの積義のいわゆる「主流派」は、主が聖体を制定したことを否定します。そして、イエスの亡骸は墓に置かれたままだといます。復活は歴史的な出来事ではなく、神学的なものの見方にすぎなくなります。これは、信仰の解釈学がないために生じたことです。そこで、世俗的・哲学的解釈学が成功を取めます。この世俗的・哲学的解釈学は、神的なものが歴史の中に現実に入り、存在しうることを否定します。第二の方法論的なレベルの不在の結果こそ、学問的積義と「靈的読書（レクチオ・ディヴィナ）」の深い断絶を生み出したものです。ここから、場合によって、説教を準備する際にある種の混乱が生じることもあります。積義が神学的な積義でない場合、聖書は神学の中心となりえません。逆もまた真実です。神学が本質的な意味で教会の中で行われる聖書の解釈でなくなれば、このような神学はもはや基盤をもたないものとなります。

それゆえ、教会生活と宣教にとって、また信仰の未来にとって、積義と神学のこのような対立を克服することが絶対に必要です。聖書神学と組織神学は、わたしたちが神学と呼ぶ唯一の現実の二つの側面です⁵⁵。

発表の冒頭で述べているように、このような聖書と神学の統合を目指した聖書解釈の試みとして、教皇自らあらためて神学者「ヨゼフ・ラッツィンガー」の名のもとに研究書『ナザレのイエス』全3巻（2007-2012年）を世に問うた。同書序文によれば、教皇はこの著作の著述を2003年夏から開始し、教皇となってからも「あらゆる自由時間を利用」して続けた末、「時間と力がいつまで与えられるか予測することはできませんので、最初の10章を第一巻として公けにすることを決心」した⁵⁶。教皇が教皇職の激務の中で、またその高齢で、神学者として先端的な研究を行ったことは驚くべきである。

55 教皇ベネディクト十六世「世界代表司教会議第12回通常総会での発表（2008年10月14日）」『靈的講話集2008』、299-301頁。この発言はシノドスの「提言」25-27に取り入れられ、後に発布されたシノドス後の使徒的勧告『主のことば（2010年9月30日）』（*Verbum Domini*）29-36節で展開された。

56 『ナザレのイエス』邦訳16頁。

退位後の教皇に P・ゼーヴァルトが行ったインタビューの中で、ベネディクト十六世の教皇職の中で、回勅が3つ（『神は愛』『希望による救い』『真理に根差した愛』）しか公布されなかったのはなぜかという問いに対して、名誉教皇はこう答えている。「第一に、『イエス』についての著作（『ナザレのイエス』）を完成させたかったからだ。もちろん、自分の選択は間違っていたと言う人もいるだろう。しかし、とにかく理由はそれだった。そして、ヨハネ・パウロ二世が豊かな回勅を残してくれた後に、自分はテンポを落とすべきだと考えた」⁵⁷。

公刊された『ナザレのイエス』は発行順に、『ナザレのイエス』（2007年）、『ナザレのイエスⅡ 十字架と復活』（2010年）、『ナザレのイエス プロローグ：降誕』（2012年）の三巻である。2007年発行の『ナザレのイエス』の目次は次のとおりである。

はじめに

序章 イエスの神秘について

第1章 イエスの洗礼

第2章 イエスの誘惑

第3章 神の国の福音

第4章 山上の説教

1 真福八端（幸いな人）

2 メシアのトーラー

第5章 主の祈り

第6章 弟子たち

第7章 譬えの使信

第8章 ヨハネ福音書の主要な特徴

第9章 イエスの道行きを画する二つの重大な出来事——ペトロの信仰告白と変容

1 ペトロの信仰告白

2 変容

第10章 イエスの自己表明

1 人の子

2 子

3 「わたしはある」

邦訳のページ数で言えば『ナザレのイエス』519頁、『ナザレのイエスⅡ 十字架と復活』

57 拙稿「書評 ベネディクト十六世／ペーター・ゼーヴァルト『最後の対話』『上智大学キリスト教文化研究所紀要』38（2020年）、88頁。

402 頁、『ナザレのイエス プロログ：降誕』212 頁であり、内容的にも最初の巻が最も重要である。ここではその「はじめに」「序章」の内容を紹介しながら、教皇の問題意識を明らかにしたい。なお、『ナザレのイエス』の内容は、『カトリック教会のカテキズム』では第 1 編第 2 部第 2 章（神のひとり子 イエス・キリストを信じます）(422-679)、『カトリック教会のカテキズム要約』79-135 に相当する。

2.2. 『ナザレのイエス』「はじめに」、序章

教皇は「はじめに」において、まず「ナザレのイエス」研究史を振り返る。1930～40 年代、カール・アダム、ロマーノ・グアルディーニ、フランツ・ミヒエル・ヴィラム、ジョヴァンニ・パピーニ、ダニエル・ロップスらの業績をこう評価する。

これらのすべての著作においては、一人の人間としてこの地上に生きた人間イエス・キリストの姿が、福音書の記述にしたがって描かれていました。もちろん、彼は完全に人間として生きたのですが、同時に人々に神をもたらししました。彼は「子」として、神と一つであったのです。こうして人間イエスを通して神が現され、在るべき人間の姿が神によって示されたのでした。（邦訳 1 頁）

1950 年代に入ると、「歴史のイエス」と「信仰のキリスト」の間の裂け目が深まる。

批判的・歴史的研究の進歩とともに、聖書の諸伝承の間には、洗練された区別が微に入り細をうがって設けられ、その結果、信仰の規範となるイエスの姿は、ますます曖昧なものとなり、輪郭を失ってゆきました。（邦訳 2 頁）⁵⁸

58 「歴史的・批判的方法」とは、一言でいえば「福音書の本文の記述について、史実性と語り手の解釈による意味付与の間を区別（＝批判）する研究方法。様式史的研究と編集史的研究という術語で表現されることが多い」（大貫隆・山内眞監修『新版 総説新約聖書』日本キリスト教団出版局 2003 年、153 頁）。

「様式史的研究」(Form Criticism; Formgeschichte) は「とりわけ福音書伝承の「様式」(Form、より適切には「類型」Gattung と呼ばれうる)を問うことによって、当該伝承の成立・展開の法則性を明らかにする新約聖書の研究方法。……新約の分野での最初の重要な作品は K. L. シュミットの『イエス物語の枠組み』(1919 年)。この中でシュミットは、福音書はそれぞれの様式の個別伝承の集積から成り、それら伝承が福音書記者によって編集的に枠づけられていることを証明した。それによって、福音書に書いてある事件や場面のシークエンスが、従来ナイーブに想定されていたような史実を映すものではないことが明瞭になった。つまり、時間的に正確なイエスの「伝記」はもはや再構成できないことが宣言されたのである。さらに M. デイベリウスは、『福音書の様式史』(1919 年)において、大部分の伝承が「範例」「物語」「伝説」「訓戒」「神話」などの「様式」に分類できることを示し、その背後に、「宣教」「説教」という「生活の座」を中心に持つ教会共同体の存在があることを浮き彫りにした。さらに、R.ブルトマンの『共観福音書伝承

イエスについてはいずれにせよほとんど確実なことは知りえないのであり、結局、彼の神性についての後世の信仰が彼の姿を後から作り上げたのだという印象だけが残ることとなったのでした。(同) ⁵⁹

シュナッケンブルクが真に歴史的な認識の決定的な点として強調しているのは、イエスの神との関係、神との結び付きです。……この認識は、本書においてもその基本的な線として踏襲されております。私もイエスを「父」との一致から理解しております。このことは人間としての彼の存在の本来的な中心であり、それなくしては私たちは彼について何も理解することはできないし、そこからのみ、彼は、今日の私たちにとっても現存する者となるのです。(4頁)

では、『ナザレのイエス』の方法はいかなるものか。

[……] シュナッケンブルクのとった立場の問題点は、次の文章に非常に明確に現れているように私には思われます。福音書は「この地上に現れた、神秘に満ちた神の子に、いわば、肉体をまとわせようとつとめている」。⁶⁰ [……] これに対して私は、彼に肉体を「まとわせる」必要はない、彼は現実に肉体をとって現れたのだ、と言いたいのです。

史』(1921年)は、福音書伝承を一層徹底的に分析した。彼はまず、「言葉伝承」と「物語伝承」の二範疇を設け、「言葉伝承」の様式として「アポフテグマ」と「主の言葉」を提示し、「物語伝承」の様式として「奇跡物語」と「歴史物語」と「レグンデ(聖譚)」を掲げる。そしてその各々が、もう一段階細部の個別分類となる様式を与えられ、それらの諸様式に、福音書のほとんどすべての伝承部分が分類されていくのである。さらにブルトマンは、時が経過するにつれて「生活の座」が変貌し、それと共に様式自体が変化していくプロセスを追跡した。この広範な研究は圧倒的な影響力を持ち、これ以降の福音書研究の基礎を築いたと言っても過言ではない。しかし同時に、こうして一定の法則に従って展開していく伝承様式の研究は、福音書の枠組みが二次的であることの発見とあいまって、それまでの楽観的なイエスの生の伝記的再構成の息の根を止め、それに決定的な引導を渡してしまったのである」(樋口進・中野実監修『聖書学用語辞典』日本キリスト教団出版局2008年、374-75頁)。

「編集史的研究」(Redaction Criticism; Redaktionsgeschichte)は「文書の最終的な編集者である著者の文書資料や口頭伝承に対する編集的な取り扱い方(伝承の取捨選択、改変、枠づけ、配列等)を文書全体にわたって考察することにより、その編集作業の背後にある著者の神学的意図を見きわめ、さらにその背景にある史的状況との関連を探究しようとする研究方法」(同、318-319頁)。

⁵⁹ 「イエス伝研究史」については、大貫隆・佐藤研編『イエス研究史 古代から現代まで』日本基督教団出版局1998年、岩島忠彦『イエス・キリストの履歴』オリエンズ宗教研究所、2011年、特に40-49頁参照。

もちろん、この肉体を諸伝承の藪を通して見出すことができるかどうかの問題は残ります。(同)

「批判的・歴史的方法」はどう扱うべきか。

シュナッケンブルクは彼の本の序文において、批判的・歴史的方法に従って研究を行うことは言うまでもないことであると言っております。この学問的方法は、1943年の回勅「ディヴィノ・アフランテ・スピリトゥ」によってカトリック神学においても認められるようになったのでした。(5頁)。

{……} 私は本書の著述において〔これまでの教導職文書から引き出される〕指針に従いました。

まず第一に、歴史的な方法は、まさに神学と信仰の本質からして、聖書解釈学の研究にとって不可欠の要素であり、またそうであり続けるということです。聖書的な信仰にとっては、それが現実の歴史の出来事に基礎づけられているということが本質的なことなのです。(5-6頁)

しかし、聖書の諸書の中に聖なる書を認め、それが神の靈感によって書かれたものであると信じる者にとっては、批判的・歴史的方法は、聖書解釈についてのガイドラインを汲みつくしているとは言えません。{……}

まず重要なことは、批判的・歴史的方法自身の限界を認めることです。{……} 批判的・歴史的方法の第一の限界は、歴史的方法の本質からして、言葉を過去のうちにそっとしておかねばならないということです。{……} しかし、それを「今日的なもの」にしてしまうことはできないのです。{……} 過去のことの積義における正確性、それがまさに歴史的方法の強さであると同時に、限界でもあるのです。

さらに {……} 歴史的方法は、その本質からして、歴史の出来事関連における等質性を前提します。したがってそれは、それが対象とする言葉を人間の言葉として扱わなくてはなりません。{……}

最後に、歴史的方法は、聖書の個々の書とその歴史的な時点において観察し、さらにその資料を探求します。しかし、これらすべての書を「聖書」として統一的にとらえることは、歴史的方法の直接的な研究の対象とはなりません。{……}

また、過去についての認識の努力に常につきまとう限界として、それが仮説の世界を超えることのできないものであることを確認しておかねばなりません。(6-8頁)

ここで教皇が方法として採用しようとするのが、「正典指向的聖書解釈」(canonical

exegesis) である⁶⁰。それは、

60 なお、教皇が『ナザレのイエス』において採用した「正典的方法」は、2018年に日本聖書協会が発行した『聖書 聖書協会共同訳』の基盤となった考え方である。拙稿『「聖書 聖書協会共同訳」——回顧と展望』『New 聖書翻訳』No.5 (2019年) 1-21頁、「巻頭言 『聖書 聖書協会共同訳』発行の意義』『神学ダイジェスト』第130号 (2021年)、1-7頁参照。

近年、「正典的方法」が注目されるようになった経緯は、以下のとおりである。新共同訳の翻訳が行われた1970年代から1980年代にかけて、聖書学、特に旧約聖書学では歴史的・批判的方法に基づく聖書テキストの資料批判(伝承史・編集史)が主流であった。ところが、1990年代になると、旧約学は、五書の資料仮説(JEDP仮説)が否定されるなど(R・レントルフ)、従来の旧約学の基盤をなす定説が崩壊するという大きな転機を迎えた。同時にB・C・チャイルズ(B. S. Childs, *Introduction to the Old Testament as Scripture*, Philadelphia, Fortress Press, 1979)らによる「正典的アプローチ」が評価されるようになった。これは、最終形態としての聖書テキストを全体として捉える見方である。正典的アプローチでは、テキストの構造(たとえばテキストの中で同一フレーズが用いられて枠を構成する「インクルージオ」)に注目するので、そのために、できるだけ訳語を原語と対応させて訳すことが必要となる。聖書協会共同訳は、こうした聖書学の変化も反映している。

たとえば、新共同訳では「神に従う人」と訳されたヘブライ語「ツァディク」が、聖書協会共同訳では「正しき者」と訳される。ヘブライ語「ツェデカ」は、新共同訳で「恵みの御業」と訳されたのに対して、聖書協会共同訳では「義」と訳される。こうして同根語の「ツァディク」「ツェデカ」の意味のつながりが分かりやすくなった。

正典的アプローチについては、飯謙「第二章 文芸学的方法——理念と応用」、木幡藤子・青野太潮編『現代聖書学講座第2巻 聖書学の方法と諸問題』日本基督教団出版局、1996年、43-60頁、中野実「第9章 正典批評」、浅野淳博・伊東泰樹・須藤伊知郎・辻学・中野実・廣石望・前川裕・村山由美『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局、2016年、280-319頁参照。旧約学の最近の動向については、大島力「旧約学の動向と聖書翻訳」『New 聖書翻訳』No.1 (2014年)、29-44頁、山我哲雄「戦後日本の旧約聖書学の歩み」『福音と世界』2015年7月号、14-21頁参照。旧約聖書学における最近の研究としては、魯恩碩『旧約文書の成立背景を問う——共存を求めるユダヤ共同体』日本キリスト教団出版局、2017年参照。『聖書 聖書協会共同訳』における正典的解釈の適用例については、飯謙「旧約詩編の新翻訳に関する覚え書き」『New 聖書翻訳』No.2 (2015年)、15-26頁、同「聖書協会共同訳——聖書翻訳から啓かれたこと」『聖書事業懇談会講演録2』日本聖書協会、2018年、73-95頁、大島力・小友聡・島先克臣(編集)、飯謙・池田裕・石川立・小林進・高橋洋成・月本昭男・本間敏雄『ここが変わった! 「聖書協会共同訳」 旧約編』日本キリスト教団出版局、2022年、小友聡「新翻訳聖書の魅力——旧約詩文学を実例として——」『New 聖書翻訳』No.3 (2017年)、1-14頁、同「新翻訳聖書の魅力——旧約詩文学を実例として——」『聖書事業懇談会講演録1』日本聖書協会、2017年、85-109頁参照。

個々のテキストの理解においては、正典として認められている聖書全体を視野に入れて読むべきであるというものです。(9頁)

『神の啓示に関する教義憲章』12では「神学的聖書解釈の3つの原則」が示されている。

まず、聖書の統一性について考えましょう。〔……〕聖書の中に伝承された言葉が聖書としてまとまってゆくプロセスは、常に新たな「読み返し (Relectures)」によって行われていることが、現在の聖書解釈学によって明らかにされました。古いテキストは新しい状況の中で新たに提起され、新たに理解され、新たに読まれたのです。〔……〕このプロセスを、イエス・キリストの視座から見れば、全体を通して一つの方向性があること、旧約聖書と新約聖書が一つの全体をなしていることが見えてきます。〔……〕

私はさらに神学的聖書解釈の二つの視点を示したいと思います。〔…〕著者は〔…〕彼自身がそれによって担われている共通の歴史の中から、そしてまた、その歴史の未来の可能性が未展開のままで既にそこに現存している共通の歴史の中から語っているのです。〔……〕

聖書は、一つの生きた主体である旅する神の民の中において、またその中から生まれてきたものであり、その中に生きております。〔……〕その意味では、本来的には神の民が著者であるということになります。しかしさらに、この民は〔……〕その深い所において語る神によって導かれ、語りかけられていることを自覚しているのです。(9-13頁)。

『ナザレのイエス』において基盤となるのは、何よりも福音書に対する信頼である。

イエスの姿を描くに際して私が心掛けたことは、福音書に対する信頼を第一に置くということです。〔……〕〔公会議が言っていることの〕すべてをできる限り受け入れ、その上で、福音書のイエスを真のイエス、本来の意味での「歴史のイエス」として描くことを試みました。このようにして示されたイエスの姿は、最近の数十年において私たちが出会ったどの再構成の試みより、はるかに論理的であり、歴史として見てもはるかに理解しやすいものであることを、読者にも納得していただくと確信し、希望しております。私は、このイエス、福音書のイエスは、歴史的にも意味のある、また整合性のあるイエス像であると考えております。(13-14頁)

イエスの十字架後の20年間にフィリピの信徒への手紙のようなキリスト賛歌(フィリピ2・6-11)が生まれた理由について、

批判的研究が疑問を提出するのは正当なことです。しかし、無名の教団の働きを仮定し、その担い手を探し出そうとしても、それは何の説明にもなりません。〔……〕初めに何か偉大なことが起きたのだと考えることの方が、存在するすべてのカテゴリーを粉砕するほどの力をイエスが現実にも有していたのであり、それは神の神秘からのみ理解しうるものであったのだと考えることの方が、歴史的にもはるかに論理的であるのではないのでしょうか。(14-15 頁)

私が試みたことは、単に批判的・歴史的である聖書解釈を超えて、新しい方法論的な認識を応用したというだけのことです。この新しい認識は、聖書の本来的な神学的解釈の道を開くものであり、したがって信仰を要求するものですが、歴史的な真剣さを放棄しようとするものではありません。それは許されないことです。(15-16 頁)

ここでは、「序章 イエスの神秘について」で示される「ナザレのイエス」の姿をかいま見るにとどめたい。教皇は「申命記」の約束の言葉からイエスに接近する。

申命記の第 18 章⁶¹は、未来を自分の手に入れ、これを思いのままにしようとするすべての道を主の前にいとうべきこととして断罪し、これに対してイスラエルが従うべき道として、信仰の道を対置しました。そしてこれを約束という形で行ったのです。(21 頁)

〔申命記 34・10⁶²は〕約束の言葉によって単に預言者の身分の設置が意味されていたのではないことを明らかに示しています。そこで言われていたのは、それをはるかに超えるもの、一人の新しいモーセの告知であったのです。〔……〕より徹底的な出エジプトが必要であること、そのためには一人の新しいモーセがなくてはならないことが、明らかとなったのです。(22 頁)

申命記が示しているモーセの姿はいかなるものであったか。

モーセ〔……〕は、「顔と顔をあわせて」主と交わったのでした。友がその友と話すように、彼は神と話したのでした(出 33・11)。〔……〕決定的なことは、彼が神と友のように語ったということなのです。〔……〕私たちに神の顔を示し、それによって、私たちの取るべき道を示すために、預言者はあるのです。預言者によって指し示される未来は〔……〕本来の「出エジプト」に向けての道しるべであり、歴史のすべての道に

61 申命記 18・15「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

62 「イスラエルには、再びモーセのような預言者は現れなかった。」

において神への道を本来的な方向として求め、見出すことに向けられているのです。(23頁)

〔出 33・20 以下⁶³が示すように〕 私たちにとって重要なのは、モーセを偉大な啓示の仲介者、契約の仲介者とした、彼の神との直接的な関係には限界があったということです。〔……〕 彼は神を見ることはなかったのです。こういうわけで、「わたしのような預言者」についての約束はさらにより大きな期待を言外に担うこととなりました。最後の預言者、新しいモーセには、第一のモーセには与えられなかったもの、すなわち、神を本当に直接に見、その直観のうちに神と語ることのできる恵みが与えられるという期待がこめられていたのです。(24-25頁)

〔ヨハネ 1・18⁶⁴が述べる通り〕 イエスにおいて新しい預言者の約束は成就されたのです。モーセにおいては不完全な形でしか行われなかったことが、イエスにおいて完全な形で実現したのです。彼は、神と面と向かって、単に友としてではなく、子として生きたのです。彼は父との内的な一致において生きたのです。(25頁)

この視点から見るときにおいてのみ、新約聖書において出会われるイエスの姿は、現実のものとして理解することができます。〔……〕 この本来の中心を外すなら、イエスの姿の本質は見過ごされてしまいます。〔……〕 イエスの教えは人間からのものではありませんでした。それは、父との直接のふれあい、「顔と顔と」向き合っの父との対話から来るものです。父のふところに憩う者の直観から来るものです。それは子の言葉です。(26頁)

イエスを理解するには、イエスが「山に」引きこもり、夜を徹して祈り、父とともに「ひとりで」いたという、繰り返し繰り返し語られる書き込みが重要です。〔……〕 イエスのこの「祈り」は子の父との語りです。イエスの人間としての意識と意志、人間としてのイエスの魂はこの祈りに吸い込まれてゆき、人間としての「祈り」は、子としての父との交わりへの参入となることが許されるのです。(27頁)

その意味で、教皇が祈りについて語る次の説教のテキストは、イエスを理解するうえできわめて重要なものであると言わなければならない。したがって、先に言及した教皇の講話集『イエスの祈り』を、『ナザレのイエス』と合わせ読むことが勧められるのである。

63 「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」

64 「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」

今日記念される聖ブルーノの使命の意味は、今日の祈願の中ではっきりと説明されているということが出来ます。この祈願は、イタリア語の典礼文ではすこし違っていますが、ブルーノの使命が沈黙と観想であったことを思い起こさせてくれます。

ところで、沈黙と観想には目的があります。それらは、日常生活の喧騒の中で、神との絶えざる一致を保つために役立ちます。これが、沈黙と観想の目的です。神との一致はわたしたちの心の中に常にとどまり、わたしたちの生活全体を造り変えてくれるのです。

聖ブルーノの特徴であった沈黙と観想は、わたしたちが、日常生活の喧騒の中で、この神との深い継続的な一致を見いだすのに役立ちます。沈黙と観想……。神学者のすばらしい召命は、語ることです。神学者の使命は、現代や他の時代の饒舌の中で、ことばの氾濫の中で、本質的なことばが聞こえるようにすることです。ことばを通して、みことばが聞こえるようにすることです。みことばとは、神から来るものであり、また神です。

けれどもわたしたちは、さまざまなことばの語られるこの世の一部です。ですから、さまざまなことばの中でみことばが聞こえるようにするためには、わたしたちの思いを浄めることが必要です。この浄めは、何よりもまず、わたしたちのことばの浄めを必要とします。

みことばがそこから発せられた、神の沈黙に入ることなくして、どうして世の耳を、また何よりもまずわたしたちの耳を開くことができるでしょうか。ですから、わたしたちのことばを浄めるために、また世のことばを浄めるために、わたしたちは沈黙を必要とします。この沈黙は観想となります。それはわたしたちを神の沈黙へと導き、そして、みことばが、すなわちわたしたちをあがなうみことばが生まれたところへとわたしたちを伴います。

聖トマス・アクィナスは、長い伝統を踏まえてこうっています。すなわち、神学において、神はわたしたちが語る対象ではないと。これは、わたしたちの規範とすべき考えです。

実際、神は対象ではなく、むしろ神学の主体です。神学を通して語るかた、語る主体は、神ご自身でなければなりません。そしてわたしたちのことばと思想は常に、神が語ること、すなわち神のみことばが聞こえるようになり、世においてその場を見いだすことができるために、役立つものとならなければなりません。

ですから、わたしたちはあらためて、このように自分のことばを捨てる道へと招かれています。それは浄めの道です。それは、わたしたちのことばが、神が語るための手段にすぎないものとなるためです。そこから、ほんとうの意味で、神は神学の対象ではなく、主体となることのできるのです。

このことに関連して、聖ペトロの手紙一1章22節のとてもすばらしいことばがわた

しの心に浮かびます。ラテン語ではこういわれています。「あなたがたは真理への従順のうちその魂を浄めています」(Castificantes animas nostras in oboedientia veritatis)。真理への従順はわたしたちの魂を「浄め」ます。こうしてそれは、わたしたちを正しいことば、正しい行いへと導きます。

いいかえると、称賛を受けるために語ること、人びとが聞きたいように語ること、すなわち一般の支配的な意見に従って語ることは、いわば、ことばと魂を売り渡すことだと考えられます。

使徒ペトロがいう「清さ」は、このような基準に従うことでも、称賛を求めることでもありません。むしろそれは、真理への従順を追求することなのです。

そしてわたしは、これが神学者に求められる根本的な徳だと考えます。この真理への従順という規律は、たとえそれが厳しいものであっても、わたしたちを真理とともに働く者、真理の代弁者とします。なぜなら、現代のことばの氾濫の中で語るのはわたしたちではなく、わたしたちの中で語る真理だからです。実際に、わたしたちは真理への従順によって浄められ、清いものとされます。こうしてわたしたちはほんとうの意味で真理を担うことができるのです。

このことはわたしに、アンチオケの聖イグナチオと、そのすばらしいことばを思い起こさせます。「主のことばを理解した人は、彼の沈黙をも理解します。主はその沈黙によって知られなければならないからです」。イエスのことばの分析は、あるところまで行けるかもしれませんが、それはわたしたちの考えの範囲にとどまります。

この主の沈黙に至ったときに、初めてわたしたちは、主が御父とともにおられ、そこからことばが発せられたところから、ほんとうの意味で、主のことばの深い意味を理解し始めることができるのです。

聖書が述べているように、イエスのことばは、山の上で、彼が御父とともにおられることによって生まれました。

この御父と交わる沈黙から、ひたすら御父とともにいる沈黙の中から、ことばは生まれます。また、この沈黙に至り、この沈黙から出発することによって初めてわたしたちは、みことばの真の深い意味に達し、みことばの正しい意味を解釈する者となることができるのです。主はことばに出して、自分とともに山に登るようにわたしたちを招きます。それは、主の沈黙の中で、わたしたちがあらためてことばの真の意味を学ぶためです。〔……〕⁶⁵

2.3. 『イエスの祈り』

65 教皇ベネディクト十六世「国際神学委員会総会閉会ミサ説教(2006年10月6日)』『靈的講話集2006』、309-313頁。

今指摘したとおり、教皇ベネディクト十六世の『ナザレのイエス』において、イエスの祈りは特別な重要性を持っている。そして、イエスが祈りの中で父との関係を深めたように、われわれもまた、イエスの祈りから祈りを学ぶことができる。

キリスト教の祈りは、イエスが教えてくださった祈りであり、教会がわたしたちに教え続けている祈りでもあります。実際、人はイエスのうちに、父と子の深く親しい関係をもって神に近づくことができるようになりました。わたしたちは最初の弟子たちとともに、へりくだりと信頼をもって、師であるかたに向かって願います。「主よ、わたしたちにも祈りを教えてください」（ルカ 11・1）⁶⁶。

ひざまずくこと

教皇は連続講話「イエスの祈り」において、「祈りと宗教的感覚が歴史全体を通じて人間の一部をなしてきたこと」⁶⁷から考察を始める。人類普遍の祈りに関して、教皇がまず注目するのは「ひざまずく」ことである。

歴史のあらゆる時代において、人間は祈りながら、神のみ前で、神から出発して、神とのかわりの中で、自らと自らの状態を考察しました。そして、自分が助けを必要とし、自分で自分の人生と希望を満たすことのできない被造物であることを体験しました。哲学者ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein 1889-1951 年) は「祈るとは、世界の意味は世界の外にあると感じることである」と述べました。人生に意味を与えるかたである神とのこの動的な関係の中で、祈りは、ひざまずくという行為のうちにそのもっとも典型的な表現を見いだします。ひざまずくという行為は、それ自体のうちに根本的な両義性をもっています。実際、わたしはひざまずくように強いられることも可能です（貧困や奴隷状態の場合のように）。しかし、自発的にひざまずくことも可能です。それによってわたしは、自分に限界があることを、それゆえ、自分が他なるかたを必要としていることを示します。わたしはこのかたに対して、自分が無力で、貧しく、「罪人」であることを言い表します。祈りの経験の中で、被造物である人間は、自らについて自覚していることを、すなわち、自分の人生について知ることができたことをすべて表明します。同時に人間は、自分とそのみ前にいる存在に全身全霊で向かいます。自分の心を神秘へと向かわせます。この神秘から、自分のもっとも深い望みが満たされ、生活の貧しさを乗り越えるための助けが得られることを待ち望むからです。祈りの本質は、このように他なるかたを仰ぎ見ること、自らを「上にあるもの」に向けることのうちにあります。祈りは感情や非本質的なことがらを超えた現実の体

66 教皇ベネディクト十六世、一般謁見（2011年5月4日）、『イエスの祈り』、14頁。

67 同、一般謁見（2011年5月11日）、『イエスの祈り』、22頁。『カトリック教会のカテキズム』2566、『カトリック教会のカテキズム要約』535参照。

験だからです。

しかし、ご自身を現してくださる神においてのみ、人間の探求は完全に満たされます。祈りは心を神に向けて開き、高く上げることです。こうして祈りは神との個人的な関係となります。たとえ人が自らの創造主を忘れても、生きておられる真の神はまず第一に、祈りによる神秘的な出会いへと人間を招き続けます。『カテキズム』が述べるとおりです。「祈りはまず忠実な神の愛の呼びかけで始まるものであり、人間が行うことはそれへの応答にすぎません。神がご自分を啓示し、人間自身の真の姿を明らかにされるにつれて、祈りがいわば相互の呼び合い、契約のドラマとなっていくます。そしてこのドラマが、ことばと行為とを介して心を支配するものとなります。そのことは救いの全歴史を通して明らかにされています」(同 2567) ⁶⁸。

聖書を読むこと⁶⁹

「祈り」に関する連続講話の中で教皇は、祈りに関わる「霊的かつ具体的なこと」として、特に休暇中に「聖書を読むこと」の重要性も指摘している。

自分の活動を休んでいるとき、とくに休暇の間、わたしたちはしばしば、読みたい本を手に取ります。これが、今日考えてみたい第一の点です。わたしたちは皆、精神を集中し、黙想し、静かに過ごす時間と場所を必要としています。そのように過ごせるのはありがたいことです。実際、こうした欲求は、わたしたちに次のことを示します。すなわち、わたしたちが造られたのは、働くためだけではなく、思考し、反省し、また、ただ思いと心をもって物語を読むためです。わたしたちはこのような物語と一体化し、ある意味でその中で「われを忘れます」。それは、後で豊かになった自分を再び見いだすためです。

もちろん、休暇のときに読む多くの本はたいへいの場合、気晴らしのためであり、それは正常なことです。しかし、さまざまな人、とくに長期間、休暇をとって休める人は、よりむずかしい本を読もうと努めます。そこでわたしは一つの提案をしたいと思えます。普通、あまり知られていない聖書のいくつかの書を開いてみてはいかがでしょう。あるいは、典礼の中で一部は聞いたことがあっても、全体を読んだことのない書を読んでみてはいかがでしょう。実際、多くのキリスト信者は聖書を読みません。そして、聖書について限られた表面的な知識しかもっていません。聖書は、名前が示すとおり、さまざまな書物をまとめたものです。それは数千年の間に生まれた小さな「図書館」です。聖書に含まれる「小さな書」のあるものは、善良なキリスト信者を含めた、大部分の人々に知られていません。そのうちのいくつかはたいへん短いものです。たとえば、

68 同、『イエスの祈り』、26-28 頁。

69 祈りの源泉としての聖書については、『カトリック教会のカテキズム』2653、『カトリック教会のカテキズム要約』558 参照。

トビト記です。トビト記は、家庭と結婚がもつ深い意味を述べた物語です。あるいはエステル記です。エステル記の中で、ユダヤ人の王妃エステルは信仰と祈りをもって自分の民を絶滅から救います。あるいは、もっと短いものに、ルツ記があります。ルツは、神を知り、その摂理を体験した異邦人です。これらの小さな書は、一時間で読み通すことができます。もっとむずかしいものですが、真の意味で傑作といえるのは、ヨブ記です。ヨブ記は、罪のない人の苦しみという大きな問題を扱います。また、コヘレトの言葉があります。コヘレトの言葉は、揺れ動く現代性のゆえにわたしたちの心を打ちます。そこでは人生とこの世の意味が論じられるからです。雅歌は、人間の愛についての驚くべき象徴詩です。見てのとおり、これらの書はすべて旧約聖書の書物です。新約はどうか。確かに新約聖書はもっと知られており、文学ジャンルもそれほど多岐にわたってはいません。しかし、福音書全体を通読することのすばらしさを認識すべきです。使徒言行録や書簡についても同じことを勧めます。

親愛なる友人の皆様。終わりに、今日、夏の間、また休みのときに聖書を手にとることをお勧めしたいと思います。それは、あまり知られていない聖書のいくつかの書を読むことによって、また福音書のようによく知られているものは通読することによって、聖書を新たな形で味わうためです。そうすれば、くつろぎの時は、教養を深めるだけでなく、精神を養うことができます。こうして精神は、もっと神を知り、神との対話である祈りを深めることができます。それは休暇のためのすばらしい仕事になると思います。聖書を手にとってください。くつろぎながら、神のことばの広大な空間に分け入ってください。永遠なるかたとの触れ合いを深めてください。これこそが、主がわたしたちに与えてくださった自由な時間の目的だからです⁷⁰。

黙想すること⁷¹

もう一つ、教皇が重要なこととして勧めるのは、「黙想すること」である。

{……} 今日わたしはこの信仰の歩み全体についてお話するつもりはありません。むしろ、祈りの生活のわずかな点についてお話したいと思います。すなわち、神に触れる生活である、黙想です。黙想とはいかなることでしょうか。それは、主がなされたことをすべて「思い起こす」こと、主のすべての恵みを忘れないことです（詩編 103・2b 参照）。わたしたちはしばしば、よくないことだけに目をやります。わたしたちはよいこと、すなわち神が与えてくださった恵みも記憶にとどめなければなりません。神からもたらされるよいしるしに目をとめ、それを憶えていなければなりません。それゆえ、

70 同、一般謁見（2011年8月3日）、『イエスの祈り』、76-79頁。

71 黙想については、『カトリック教会のカテキズム』2705-2708、『カトリック教会のカテキズム要約』570参照。

わたしたちはここで、キリスト教の伝統の中で「心の祈り（念禱）」⁷²と呼ばれる種類の祈りについて語っています。わたしたちは口禱⁷³をよく知っています。もちろん口禱の中でも思いと心を用います。しかし、今日わたしは黙想についてお話しします。黙想は、ことばを伴わず、自分の精神を神のみ心に触れさせます。ここでもマリアは真の意味で模範です。福音書記者ルカは何度も繰り返して、マリアが「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」（ルカ 2・19。2・51b 参照）と述べます。マリアはこれらのことを心に納めて、忘れませんでした。彼女は、主がいわれたこと、なされたことのすべてに心をとめ、それを思い巡らしました。すなわち、さまざまなことに触れて、それを心の中で深く考えたのです。

それゆえ、マリアは天使が告げたことを「信じ」、いと高きかたの永遠のみことばが受肉できるための道具となったかたです。このかたはまた、神であり人であるかたの誕生という驚くべき不思議なわざを心に受け入れ、それを黙想し、神が自分の中で行われたすべてのことを深く考察しました。それは、神のみ心を自分の人生のうちに受け入れ、これにこたえるためです。神の子が受肉し、マリアが母となるという神秘はきわめて偉大なものだったので、それはこれを内面化する過程を必要としました。神がマリアのうちで行ったことは単に物理的なことではなく、マリアの側から内面化することが必要でした。マリアはそれを知性で深く理解し、意味を解き明かし、結果と影響をとらえようと努めました。こうしてマリアは、日々、日常生活の沈黙のうちに、その後も自分が目の当たりにしたさまざまな出来事を心の中に納めました。この出来事には、十字架という最大の試練と復活の栄光も含まれます。マリアは自分の生涯、日々の務め、母としての使命を完全にまっとうしました。しかし、彼女はまた、神のことばとみ心、自分の身に起きたすべての出来事、御子の生涯の神秘を考察するための内的な空間を自分のうちに持ち続けることもできたのです。

現代のわたしたちは、多くの活動、仕事、心配事と問題に忙殺されています。立ち止まって自分を顧み、霊的生活、すなわち神との触れ合いを深めるための時間をもたずに、一日の時間を埋めようとするこゝもしばしばです。マリアは次のことをわたしたちに教えてください。どれほど多くの活動をしていても、日々の生活の中で、沈黙のうちに精神を集中し、主が自分に教えようと望んでおられること、主がどのようなしかたで世とわたしたちの生活の中におられ、働いておられるかを黙想する時を見つけることが本当に必要です。それは、一時、立ち止まって、黙想できるためです。聖アウグスティヌスは、神の神秘を黙想することを食物を消化することにたとえます。彼はキリス

72 「心の祈り（念禱）」または「観想的な祈り」については、『カトリック教会のカテキズム』2709-2724、『カトリック教会のカテキズム要約』571 参照。

73 「口禱」については、『カトリック教会のカテキズム』2700-2704、『カトリック教会のカテキズム要約』569 参照。

ト教の伝統を通じて見られる、「咀嚼（そしゃく）する（*ruminare*）」という動詞を用いています。神の神秘は絶えずわたしたち自身のうちで響き渡らなければなりません。神の神秘がわたしたちに親しみ深いものとなり、わたしたちの生活を導き、わたしたちの糧となるためです。それは、食物がわたしたちの健康を保つために必要であるのと同じです。聖ボナヴェントゥラ（Bonaventura 1217/1221-1274年）も聖書のことばについて触れていいます。「聖書のことばを常に咀嚼しなければならない。それは、魂が熱心に集中することによって、それを固く保つことができるためである」（『ヘクサエメロン講解』：*Collationes in Hexaëmeron*, ed. Quaracchi 1934, p. 218）。それゆえ、黙想するとは、わたしたちのうちに精神の集中と内的沈黙の場を作ることです。それは、過ぎ去り行くものだけでなく、わたしたちの信仰の神秘と、神がわたしたちのうちでなされるわざを顧み、自分のものとするためです。わたしたちはこのような「咀嚼」をさまざまなしかたで行うことができます。たとえば、聖書、とくに福音書や使徒言行録や使徒の手紙の短い記事、あるいは、神の存在を現代に現してくれるような、親しみ深い霊的著作家のことばを味わうこと。また、聴罪司祭あるいは霊的指導者の助言を受けること。読んだことを読み直し、反省し、考察すること。それがわたしに何をいおうとしているかをとらえ、悟ろうとすること。主がわたしたちに語りかけ、教えようと望まれることに自分の心を開くことです。ロザリオも黙想の祈りです。アヴェ・マリアの祈り（天使祝詞）を繰り返し唱えながら、わたしたちは、示された神秘について熟考し、考察を深めるよう招かれます。しかし、ある種の深い霊的体験や、主日の感謝の祭儀にあずかって印象に残ったことばを考察することもできます。それゆえ、ご覧のとおり、黙想にはいろいろなやり方があります。神に触れ、神に近づき、そこから、樂園に向かって歩むには、いろいろな方法があるのです。

親愛なる友人の皆様。粘り強く神のために時間をとることは、霊的成長にとって根本的な要素です。主ご自身が、ご自身の神秘と、ことばと、現存と活動を味わわせてくださいます。神がわたしたちに語ることのすばらしさを感じさせてくださいます。神がわたしに、わたしたちに望まれることを深く理解させてくださいます。要するに、黙想の目的はこれです。それは、わたしたちはみ心を行うことによって初めて最終的に真の幸福を得るのだと確信しながら、信頼と愛をもって、ますます神のみ手に身をゆだねることです⁷⁴。

イエスの生涯における祈り

祈りについての28回の連続講話（『イエスの祈り』）で最も多くの時間が当てられているのは、イエスの祈りについての考察である（全10回）。

74 教皇ベネディクト十六世、一般謁見（2011年8月17日）、『イエスの祈り』、84-89頁。

イエスの祈りはその生涯を貫いています。それは隠れた水路のように、イエスの生涯と人とのかかわりで行いを潤します。そして、父である神の愛の計画に従う完全な自己奉獻へとますます強くイエスを導きます。イエスはわたしたちの祈りの師でもあります。そればかりか、彼は、わたしたちが御父に向かうたびごとに、いつも力強く兄弟として支えてくださいます。まことに『カトリック教会のカテキズム要約』の標題が要約するとおり、「祈りはイエスにおいて完全に啓示され、実現される」(同 541-547) のです⁷⁵。

「イエスの祈り」に関する考察の最初に、教皇は「イエスの生涯における祈り」というテーマで、公生活に先立つ時期も含めた、イエスの生涯全体における祈りの意味に目を向ける。

[……] この特別な祈りの背景にあるのは、イスラエル民族の宗教的伝統と深く結ばれた家族の中でイエスが体験した、生活全体です。福音書に見いだされるさまざまな言及がこのことを示します。すなわち、イエスが割礼を受けられたこと(ルカ 2・21 参照)、神殿でささげられたこと(ルカ 2・22-24 参照)、ナザレの聖なる家で教育と養成を受けたことです(ルカ 2・39-40、2・51-52 参照)。この生活は「およそ三十年」(ルカ 3・23) に及びました。それは、エルサレムへの巡礼のような、共同体として信仰を表す行事に参加する体験を含むとはいえ(ルカ 2・41 参照)、長く隠れた、子としての生活でした。福音書記者ルカは、十二歳のイエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座っていたという出来事を語ります(ルカ 2・42-52 参照)。そこからルカは、ヨルダン川での洗礼の後に祈ったイエスが、父である神と親しく祈る習慣を長くもち続けていたことを垣間見させてくれます。この祈りは、伝統と、家族の生き方と、イエスが行った決定的な体験に根ざしていました。十二歳のイエスのマリアとヨセフへの答えは、すでに、洗礼の後に天からの声が現した、彼の神の子としてのあり方を示しています。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」(ルカ 2・49)。イエスはヨルダン川から上がったとき、初めて祈りを始めたわけではありません。むしろ彼は、御父との絶えることのないいつもの関係をもち続けました。そして、この御父との深い一致のうちに、イエスはナザレの隠れた生活から公生活への移行を行ったのです。

確かに、イエスの祈りについての教えは、家庭の中で身に着けた祈り方に由来します。しかし、その深く本質的な起源は、彼が神の子であること、彼の父である神との独自の関係のうちにあります。『カトリック教会のカテキズム要約』は、「イエスはだれから祈ることを学ばれましたか」という問いに次のように答えます。「イエスは、人間の心で、母親とユダヤ教の伝統から祈ることを学ばれました。しかし、イエスの祈りは、より秘

75 同、一般謁見(2011年11月30日)、『イエスの祈り』、168頁。

められた源からほとぼしるものでした。なぜならイエスは、その聖なる人性のうちに子としての完全な祈りを御父にささげる、永遠の神の子だからです」(同 541)。

福音書の記事の中で、イエスが祈る場面は、いつも彼が属するご自分の民の伝統と、新しい神との独自の個人的な関係の交差するところに位置づけられます。イエスがしばしば退いた「人里離れたところ」(マルコ 1・35、ルカ 5・16 参照)、祈るために登った「山」(ルカ 6・12、9・28 参照)、一人になることができた「夜」(マルコ 1・35、6・46-47、ルカ 6・12 参照)は、旧約における神の啓示の歩みにおけるさまざまな出来事を思い起こさせます。そして、神の救いの計画の継続性を示します。しかし同時にそれらは、イエスにとって特に重要な意味をもつ出来事も示します。イエスは、御父のみ心に完全に忠実に従いながら、意識的にこの神の計画のうちに自分を組み入れたのです。

わたしたちも祈るとき、イエスを頂点とする、この救いの歴史に歩み入ることをますます学ばなければなりません。自分の心を神のみ心に開こうとする個人的な決心を、神のみ前で新たにしなければなりません。生涯全体をもって、わたしたちに対する神の愛の計画に忠実に従いながら、自分の望みを神のみ心と一致させる力を与えてくださるよう、神に願わなければなりません。

イエスの祈りは、その奉仕職のさまざまな状況と、日々の全体にかかわります。疲れはイエスの祈りの妨げとなりません。むしろ福音書は、イエスが夜通し祈りながら過ごすのが習慣だったことを明らかにします。福音書記者マルコは、パンを増やした辛い一日の後の、こうした夜の一つについて記しています。こう書かれています。「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間にご自分は群衆を解散させられた。群衆と別れてから、祈るために山へ行かれた。夕方になると、舟は湖の真ん中に出ていたが、イエスだけは陸地におられた」(マルコ 6・45-47)。切迫した複雑な決定を行うとき、イエスはより長く熱心に祈りをささげました。たとえば、十二人の使徒の選定が迫っていたとき、ルカは、イエスが準備のために夜中、祈ったことを強調します。「そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名づけられた」(ルカ 6・12-13)。

イエスの祈りに目を向けるとき、わたしたちは自らに問いかけなければなりません。わたしはどのように祈っているのでしょうか。わたしたちはどのように祈っているのでしょうか。わたしはどれほどの時間を神との関係のために用いているのでしょうか。今日、祈りについての教育と養成が十分なされているのでしょうか。だれが祈りを教えることができるのでしょうか。わたしは使徒的勧告『主のことば』の中で、祈りを込めて聖書を読むことの大切さについて述べました。わたしはシノドス総会で出された意見をまとめながら、特に霊的読書(レクチオ・ディヴィナ)という特別な祈り方を強調しました。語りかける主のみ前で耳を傾け、黙想し、沈黙する方法を、絶えず実践することを学ば

なければなりません。いうまでもなく、祈りはたまものです。しかし、このたまものは、それを人が受け入れることを求めます。祈りは神のわざです。しかし、わたしたちも祈ろうと努力し、祈り続けることが必要です。何よりもまず、絶えず祈り続けることが大切です。模範となるイエスの体験が示すことはこれです。神の父としての愛と、聖霊の交わりによって力づけられたイエスの祈りは、オリーブの園と十字架に至るまで、長く忠実に祈りを実践することによって深められました。現代のキリスト信者は、祈りをあかしするよう招かれています。なぜなら、現代世界はしばしば、神の地平と、神との出会いをもたらす希望に対して閉ざされているからです。イエスとの深い友愛に結ばれ、イエスのうちに、イエスとともに御父との子としての関係を生きることによって、わたしたちの忠実で絶えざる祈りを通して、わたしたちは神のおられる天へと窓を開くことができます。そればかりか、人を気にしないで祈りの道を歩むことにより、わたしたちは他の人々が祈りの道を歩む助けとすることができます。キリスト教の祈りにとっても、本当に、歩むことによって道は開かれるのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。神との深い関係を学ぼうではありませんか。時々ではなく、絶えず、信頼に満たされながら、祈ることを学ぼうではありませんか。祈りは人生を照らすことができます。イエスが教えてくださったとおりで。そして、主に願おうではありませんか。近くにいる人、道で出会う人に、主と出会う喜びを伝えることができるようにしてください。主はわたしたちの人生の光だからです⁷⁶。

ナザレの聖家族の生活における祈りの重要性

公生活に入る前に、イエスがナザレの聖家族の生活の中で祈りを学んだという教皇の指摘も重要である。それはわれわれのキリスト教的な生活の中での祈りの大切さにも気づかせてくれるからである。

{……} 今日は、{……} 祈りがナザレの聖家族の生活の中にどのように位置づけられていたかを考察することへと皆様を招きたいと思います。実際、ナザレの家は祈りの学びやです。人はそこで、マリアとヨセフとイエスの模範に従いながら、神の子の現れの深い意味を聞き、黙想し、悟ることを学びます。{……}

わたしたちはイエスの幼年期に関する福音書の記事で述べられた聖家族から、祈りについて、神との関係についていくつかのヒントを得ることができます。イエスの神殿への奉獻の話から出発したいと思います。聖ルカは語ります。「モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき」、マリアとヨセフは「その子を主にささげるため、エルサレムに連れて行った」(ルカ 2・22)。律法を守るすべてのユダヤ人の家族と同じように、イエスの両親は初めて生まれた子を神に奉獻し、いけにえをささげるために、

76 同、172-176 頁。

神殿に行きました。〔……〕聖家族の巡礼は、信仰に基づいて、祈りの象徴であるささげものをささげ、主と出会うための巡礼でした。この主をマリアとヨセフはすでに御子イエスのうちに見いだしていました。

マリアはキリストの観想の比類のない模範です。御子のみ顔はマリアに特別なかたちで属しています。なぜなら、御子はマリアの胎内で形づくられ、人間として似たところもマリアから受け取ったからです。マリアほど熱心にイエスの観想に身をささげたかたはいません。マリアの心のまなざしは、すでにお告げのときからイエスだけに向いていました。お告げのとき、マリアは聖霊のわざによってイエスをみごもったからです。その後の誕生の日に至るまでの数か月間、マリアはイエスがともにいることに少しずつ気づいていきました。誕生のとき、マリアは御子を布にくるんで飼い葉桶に寝かせ、母の優しさをもって御子のみ顔に目を注ぐことができました。マリアの思いと心に刻まれたイエスの記憶は、マリアの生涯のあらゆる瞬間を特徴づけました。聖ルカはいいいます。「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(ルカ 2・19)。聖ルカは、受肉の神秘に対するマリアの態度をこのようになしかたで述べたのです。出来事をすべて心に納めて、思い巡らす態度は、マリアの全生涯に及びました。ルカ福音書記者は、マリアの心、信仰 (ルカ 1・45 参照)、希望と従順 (同 1・38 参照)、何よりもその内面性と祈り (同 1・46-56 参照)、キリストとの自由な一致 (同 1・55 参照) をわたしたちに知らせてくれます。これらすべてのことは、聖霊のたまもの由来します。聖霊は、後にキリストの約束に従って使徒たちの上に降ったのと同じように (使徒言行録 1・8 参照)、マリアの上に降りました (ルカ 1・35 参照)。聖ルカがわたしたちに示す、このようなマリアの姿は、聖母をあらゆる信じる者の模範として提示します。信じる者は、イエスのことばと行いを保ち、吟味します。この吟味は、イエスを知ることによりつねに深まります。福者教皇ヨハネ・パウロ二世に従って (使徒的書簡『おとめマリアのロザリオ』参照)、わたしたちはこういうことができます。ロザリオの祈りはマリアを模範としています。なぜなら、ロザリオは、主の母との霊的な一致のうちにキリストの神秘を観想するものだからです。神のまなざしを生きるマリアの力は、いわば伝染します。このことを最初に体験したのは聖ヨセフです。自分の婚約者に対する謙遜で真実な愛、自分の人生をマリアの人生と一致させようとする決断から、すでに「正しい人」(マタイ 1・19) であったヨセフも、神との特別に親しい関係へと引き寄せ、導き入れられました。実際ヨセフは、マリアと、そして何よりもイエスとともに、神との新たな関係をもち始めました。彼は神を自分の人生に受け入れ、神の救いの計画に歩み入り、み心を果たしたからです。「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」(マタイ 1・20) という天使の指示に信頼をもって従ったヨセフは、マリアを妻として受け入れ、マリアと人生を共有しました。ヨセフは真の意味で自分のすべてをマリアとイエスにささげました。このことが、与えられた召命へのこたえを完成するよう彼を導いたのです。ご存じのように、福音書はヨセフのことばをまったく記していません。ヨセフのことばは、

沈黙のうちに、しかし忠実に、絶えることなく、忍耐強く、ともにいることでした。わたしたちは想像することができます。ヨセフも、妻マリアと同じように、またマリアと深く協調しつつ、イエスの幼年・青年時代を過ごしました。そして、いわば家族におけるイエスの現存を味わいました。ヨセフは自分の父としての役割をあらゆる点で完全に果たしました。ヨセフがマリアとともにイエスに祈りを教えたことは確実です。とくにヨセフはイエスを、会堂（シナゴグ）の安息日の典礼や、イスラエル民族の大きな祭りのためにエルサレムに連れて行きました。ヨセフはユダヤ教の伝統に従い、毎日の（朝と晩と食事のときの）、また主要なユダヤ教の祭日の家庭の祈りを司式したに違いありません。こうしてイエスは、ナザレで過ごした日々のリズムを通して、質素な家とヨセフの仕事場で、祈りかつ働き、家族が必要とするパンを得るための労働をも神にささげることが学びました。

最後に、ナザレの聖家族が祈りの行事のためにともに集まる姿を示す、もう一つの話があります。たった今朗読されたとおり、イエスは十二歳になったとき、両親とともにエルサレムの神殿に行きました。聖ルカが強調するように、この話は巡礼という状況に位置づけられます。「さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った」（ルカ 2・41-42）。巡礼は一つの宗教表現です。この宗教表現は、祈りによって深まるとともに、祈りを深めます。ここで語られるのは過越祭の巡礼です。そして福音書記者は、聖なる都の典礼にあずかるために、イエスの家族が毎年この巡礼を行っていたことに気づかせてくれます。ユダヤ人の家族は、キリスト教徒の家族と同じように、親しい家族とともに祈るとともに、共同体とともに祈ります。自分たちが旅する神の民の一員であることを感謝するためです。そして、巡礼はまさに神の民が旅していることを表します。過越祭はこれらすべてのことを中心また頂点であり、家庭的な側面と、儀礼的・公的礼拝としての側面の両方を含みます。

十二歳のイエスの話の中では、イエスの最初のことばも記録されています。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」（ルカ 2・49）。両親は三日間探した後に、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしているのを見つけました（同 2・46 参照）。なぜこのようなことをしたのかと問うた父と母に対して、イエスはこたえていいいます。わたしは、御子がすべきこと、すなわち、御父のもとにいるということをしただけです。こうしてイエスは、まことの父とはだれか、本当の家とは何か、また、自分は変わったことや不従順なことをしたのではないことを示します。イエスは御子がいるべきところ、すなわち御父のもとにとどまりました。そして、自分の父がだれであるかを強調したのです。それゆえ、「父」ということばが、この答えのいわんとすることの中心です。それはキリストの神秘のすべてを現します。それゆえ、このことばは神秘を開示します。それは、キリストの神秘へと通じる鍵です。キリストは子だか

らです。それはわたしたちキリスト者の神秘へと通じる鍵でもあります。キリスト者は、御子と結ばれた子らだからです。同時にイエスは、祈りのうちに御父とともにいることによって、子であるとはどういうことかをわたしたちに教えます。キリストの神秘、キリスト者であることの神秘は、祈りと深く結ばれており、祈りを基盤としています。イエスはあるとき弟子たちに祈ることを教えていわれました。祈るときには、「父よ」といいなさい。いうまでもなく、ことばでそういうだけではなく、あなたがたの生涯をもってそういいなさい。あなたがたの生涯をもって「父よ」ということをますます学びなさい。そうすれば、あなたがたは、御子と結ばれたまことの子ら、まことのキリスト者となるであろう。

イエスがナザレの家庭生活にまだ完全に結ばれていた、このときにおいて、次のことに注目することが重要です。すなわち、イエスの口から「父」ということばを聞いたとき、マリアとヨセフの心が抱いたに違いない反応です。イエスは、御父とはだれかを見出し、強調します。イエスは、独り子としての自覚をもってこのことばを語ります。独り子は、まさに独り子であるがゆえに、三日間、神殿にとどまろうとしました。神殿は「父の家」だからです。わたしたちは、このときから、聖家族の生活がいつそう祈りに満たされたかと想像することができます。なぜなら、少年としての――そして後に青年、若者としての――イエスの心から、父である神との関係の深い意味が、マリアとヨセフの心に広がり、反映し続けたに違いないからです。この話は、御父とともにいるまことの状況、雰囲気をもわたしたちに示します。ですから、ナザレの家族は教会の最初の模範です。教会の中では、すべての人が、イエスの現存を囲んで、そしてイエスの仲介を通じて、父である神との子としての関係を生きるからです。この関係はまた、人と人との間の人間的な関係をも造り変えます。

〔……〕 聖家族は、ともに祈るよう招かれた家庭教会のかたどり（イコン）です。家庭は家庭教会であり、祈りの最初の学びやとならなければなりません。家庭の中で、子どもは幼いときから、両親の教えと模範のおかげで、神とはいかなるかたかを感じることを学ぶことができます。神の現存によって特徴づけられた環境の中で過ごすことができます。真のキリスト教的教育には、祈りの体験が欠かせません。家庭の中で祈ることを学ばなければ、後からこの空白を埋めることは困難です。〔……〕⁷⁷

沈黙の大切さ⁷⁸

「イエスの祈り」に関する教皇の連続講話では、沈黙の意味がしばしば取り上げられる。

〔……〕 沈黙は、町や人々との交際から遠ざかることによって守られます。沈黙は、

77 教皇ベネディクト十六世、一般謁見（2011年12月28日）、『イエスの祈り』、193-201頁。

78 沈黙については、前注64で引用した説教も参照。

精神の集中、神に耳を傾けること、そして瞑想を深めるのによい環境です。沈黙を味わうこと、いわば沈黙に「満たされる」ことそのものが、すでにわたしたちを祈りへと誘います。偉大な預言者エリヤは、ホレブ山（すなわちシナイ山）で、激しい風、さらに地震、最後に稲妻の火を目の当たりにしますが、それらの中に神の声を見いだしませんでした。むしろ彼は、静かにささやく声の中に神の声を聞きました（列王記上 19・11－13 参照）。神は沈黙の中で語ります。しかし、わたしたちは神のことばを聞くすべを知らなければなりません。だから、修道院は、神がそこで人間に語りかけるオアシスなのです。修道院には回廊に囲まれた中庭があります。この中庭は象徴的な意味をもつ場所です。なぜなら、それは閉じた空間であると同時に、天に向かって開かれているからです⁷⁹。

「イエスの祈り」に関する連続講話の最終章は、「神との関係における沈黙の大切さ」である。この講話の引用をもって本講演を結ぶこととしたい。

〔……〕シノドス後の使徒的勧告『主のことば』の中で、わたしは、イエスの生涯において沈黙が果たす役割について述べました。このことはとくにゴルゴタにおいていことができます。「ここでわたしたちは『十字架のことば』（一コリント 1・18 参照）の前に立ちます。みことばは沈黙します。みことばは死の沈黙となります。なぜなら、みことばは『語り尽くされ』て沈黙し、わたしたちに伝えるべきものを何も残さなかったからです」（同 12）。〔……〕

キリストの十字架は、イエスの沈黙を、御父に対する最後のことばとして示すだけではありません。むしろそれは、神が「沈黙」を通して「語る」ことを示します。「全能の父と引き離された体験は、受肉したみことばである神の子が歩んだ、地上の旅路の決定的な時です。十字架の木につけられたキリストは、この沈黙がもたらす苦しみを嘆きました。『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』（マルコ 15・34、マタイ 27・46）。イエスは、死の暗闇の中で、息を引き取るまで忠実に歩みながら、父に呼びかけました。イエスは死を通して永遠のいのちへと過ぎ越すとき、ご自分を父にゆだねました。『父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます』（ルカ 23・46)』（シノドス後の使徒的勧告『主のことば』 21）。十字架上でのイエスの体験は、祈る人間の置かれた状況と、祈りの頂点を深く表します。わたしたちは、神のことばを聞き、悟った後、神の沈黙によって自らを計らなければなりません。神の沈黙は、神のことばそのものの重要な表現だからです。

地上での生涯全体で、とくに十字架においてイエスの祈りを特徴づける、ことばと沈黙の力強い関係は、二つの方向性においてわたしたちの祈りの生活にもかかわります。

79 教皇ベネディクト十六世「一般謁見（2011年8月10日）」、『イエスの祈り』、80-81頁。

第一は、神のことばを受け入れることに関してです。神のことばを聞くことができるために、内的また外的な沈黙が必要です。これは現代のわたしたちにとって特別にむずかしい点でもあります。実際、現代という時代において精神の集中を行うことは容易ではありません。わたしたちが一瞬でもことばとイメージの氾濫から離れることを恐れているかのような印象を受ける場合もあります。これらのものが生活を特徴づけ、満たしているからです。そのため、すでに引用した使徒的勧告『主のことば』の中で、わたしは沈黙の価値を教えることの必要性を思い起こさせました。「教会生活における神のことばの中心的な意味を再発見することは、黙想と内的静寂の意味を再発見することでもあります。偉大な教父の伝統は、キリストの神秘がすべて沈黙を含むことを教えてくれます。神のことばは沈黙のうちに初めてわたしたちのうちに住まうことができます。みことばの女性であり、同時に、沈黙の女性でもあったマリアのうちに Rowe れたとおりです」(同 66)。わたしたちは沈黙なしに、ことばを聞くことも、傾聴することも、受け入れることできません。この原則は個人の祈りにもいえることですが、典礼にも当てはまります。典礼は、真に耳を傾けさせるために、沈黙と、ことばなしに受け入れるための時間を十分とらなければなりません。聖アウグスティヌスの次のことばは永遠に有効です。「みことばが栄えるとき、さまざまなことばは衰える (Verbo crescente, verba deficiunt)」(『説教集』: *Sermo* 288, 5: PL 38, 1307; *Sermo* 120, 2: PL 38, 677 参照)。福音書がしばしば示すとおり、イエスは、とくに決定的な決断を行う際に、群衆や弟子たちから離れて人里離れたところに独りで退きます。それは、沈黙のうちに祈り、神との子としての関係を体験するためです。沈黙はわたしたちの心の奥深くに、神が住まうための内的な空間を作り出すことができます。こうして神のことばはわたしたちのうちにとどまります。神への愛がわたしたちの思いと心に根づき、わたしたちの生活を力づけます。それゆえ、第一の方向性は、沈黙と、聞くことへと開かれた心を学ぶことです。それが、いと高きところ、すなわち神のことばへとわたしたちの心を開くのです。

しかし、沈黙と祈りにはもう一つの重要な関係があります。実際、神のことばを聞けるようにわたしたちを整えるのは、わたしたちの沈黙だけではありません。わたしたちは祈りの中でしばしば、神の沈黙の前に置かれます。わたしたちは見捨てられたかのような感覚を味わいます。神はわたしたちのことばを聞き入れず、こたえてくださらないかのように思われます。しかし、イエスの場合と同じように、この神の沈黙は、神の不在のしるしではありません。キリスト信者はよく知っています。主は、たとえわたしたちが苦しみと拒絶と孤独の暗闇の中にも、ともにいて、耳を傾けてくださるということを。イエスは弟子たちとわたしたち一人ひとりに約束されます。神は、わたしたちの人生のどんなときにも、わたしたちが必要とすることをよくご存じです。イエスは弟子たちに教えられます。「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思いついでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なも

のをご存じなのだ」(マタイ 6・7-8)。注意深い、沈黙のうちに開かれた心が、多くのことばよりも重要です。神は、わたしたちのことをわたしたち自身よりもよく知り、愛しておられます。そして、このことを知るだけで十分です。これに関連して、聖書で述べられたヨブの体験はとくに重要です。ヨブという人はまたたく間に、家族も富も友人も健康も含めて、すべてを失います。神のヨブに対する態度は、遺棄と完全な沈黙であるように思われます。にもかかわらず、ヨブは神との関係の中で、神と語り、神に叫び声を上げます。どんなことがあっても、ヨブは祈りの中で自らの信仰を完全に保ちます。そしてついに彼は自らの体験と神の沈黙の意味を見いだします。こうしてヨブは最後に創造主に向かって、こう結論づけることができます。「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます」(ヨブ 42・5)。わたしたちは皆、あたかも神が語るのを聞くことを通してのみ神を知ります。しかしわたしたちは、神の沈黙と自らの沈黙に心を開けば開くほど、神を真に知ることができるようになります。神との深い出会いへと開かれた、このような最高の信頼は、沈黙の中で深まります。聖フランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier 1506-52 年) は、主にこういつて祈りました。わたしが御身を愛するのは、御身がわたしに樂園を与え、あるいはわたしを地獄に定めることができになるからではありません。御身がわたしの神だからです。わたしは御身が御身であるがゆえに御身を愛します。

イエスの祈りに関する考察を終えようとするにあたり、『カトリック教会のカテキズム』のいくつかの教えが思い起こされます。「祈りの劇的な性格は、人となってわたしたちとともにおられるみことばにおいて完全に明らかにされます。キリストの祈りを、その証人たちが福音書の中で告げていることを通して理解したいならば、燃える柴に近づくかのように、聖なる主イエスに近づかなければなりません。すなわち、まず祈りの中でイエスご自身を観想した上で、わたしたちが祈り方を教えようとしておられる主のことばに耳を傾けるならば、主がどのようにわたしたちの祈りを聞き入れてくださるかを知ることができるでしょう」(同 2598)。イエスはどのようにわたしたちに祈り方を教えてくださるのでしょうか。『カトリック教会のカテキズム要約』には明快な答えが書かれています。「イエスは『主の祈り』によってだけでなく(もちろんそれが、祈り方を教えるわざの中心ですが)、ご自分が祈るときも祈ることをわたしたちに教えられます。このようにしてイエスは、祈りの内容だけでなく、真に祈るために必要な心構えをわたしたちに示されます。すなわち、神の国を求め、敵をゆるす心の清さ。わたしたちが感じたり理解したりすることがらを超越する、大胆な子としての信頼。そして弟子たちを誘惑から守るための、目覚めて祈ることです」(同 544)。

福音書を読むと、主はわたしたちの祈りの相手、友、証人、教師であることが分かります。イエスのうちに、わたしたちの神との対話の新しい要素が示されます。すなわち、御父が自らの子らに期待しておられる、子としての祈りです。わたしたちはイエスから次のことも学びます。絶えざる祈りは、わたしたちが自分の人生の意味を読み取り、決

断を下し、自らの召命を見いだして受け入れ、神が与えてくださった才能（タレント）を発見し、日々神のみ心を果たす上で助けとなります。神のみ心を果たすことこそが、わたしたちが人生を実現するための唯一の道です。

わたしたちはしばしば作業効率や、達成できる具体的な成果に気をとられています。イエスの祈りは、そのようなわたしたちに教えてくれます。わたしたちが立ち止まって、神との親しい交わりの時を過ごさなければならないことを。日々の騒音から「離れ」なければならないことを。それは、耳を傾け、人生を支え養ってくれる「根拠」に向けて歩むためです。イエスの祈りの中でもっともすばらしい瞬間は、イエスが、自分に語りかける人々のさまざまな病気や患いや限界に立ち向かうために、ご自分の父に向かって祈るときです。こうしてイエスは、ご自分の周りにいる人々に、希望と救いの泉をどこに探さなければならないかを教えます。すでにわたしは、感動的な例として、ラザロの墓のそばでのイエスの祈りを思い起こしました⁸⁰。福音書記者ヨハネは語ります。

「人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いでいわれた。『父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこういうのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです』。こういつてから、『ラザロ、出て来なさい』と大声で叫ばれた」（ヨハネ 11・41-43）。しかし、御父に対する祈りが最高の深みに達したのは、イエスが受難と死の時を迎えたときです。そのときイエスは、神の計画を最高のしかたで受諾して、次のことを示します。人間の意志が実現されるのは、神のみ心に完全に従うことによってであって、これに逆らうことによるものではありません。イエスの祈り、それも十字架上での御父への叫び声のうちに、「罪と死の奴隷であるすべての時代の人類のすべての悲嘆、救いの歴史におけるあらゆる願いや執り成しの祈りが集約されています。そこで、御父はこれらを受けとめ、ご自分の御子を復活させることによって、あらゆる期待を超えた形でお聞き入れになります。こうして、創造と救いの営みの中での祈りのドラマは成就し、完成されます」（『カトリック教会のカテキズム』2606）。〔……〕⁸¹

80 同、「一般謁見（2011年12月14日）」、『イエスの祈り』、187-192頁参照。

81 同、「一般謁見（2012年3月7日）」、『イエスの祈り』、245-253頁。

参考文献

1. J・ラッツィンガー／教皇ベネディクト十六世の著作

1.1. 公文書

教皇ベネディクト十六世、回勅『神は愛（2005年12月25日）』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2006年（*Deus caritas est*）。

———、回勅『希望による救い（2007年11月30日）』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2008年（*Spe salvi*）。

———、回勅『真理に根差した愛（2009年6月29日）』カトリック中央協議会、2011年（*Caritas in veritate*）。

———、使徒的勸告『愛の秘跡（2007年2月22日）』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2008年（*Sacramentum caritatis*）。

———、使徒的勸告『主のことば（2010年9月30日）』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2012年（*Verbum Domini*）。

———、自発教令『信仰の門——「信仰年」開催の告示』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2012年（*Porta fidei*）。

教皇フランシスコ、回勅『信仰の光（2013年6月29日）』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳、カトリック中央協議会、2014年（*Lumen fidei*）。

1.2. 講話集

『ヨハネ・パウロ二世からベネディクト十六世へ——逝去と選出の文書と記録』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳・編集、カトリック中央協議会、2006年。

教皇ベネディクト十六世、『霊的講話集 2005』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2007年。

———、『霊的講話集 2006』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2007年。

———、『霊的講話集 2007』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2008年。

———、『霊的講話集 2008』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2009年。

———、『霊的講話集 2009』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2010年。

———、『霊的講話集 2010』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2011年。

———、『霊的講話集 2011』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック

- ク中央協議会、2012年。
- ―――、『靈的講話集 2012・2013』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2013年。
- ―――、『使徒――教会の起源』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2008年。
- ―――、『教父』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2009年。
- ―――、『聖パウロ』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2009年。
- ―――、『司祭職』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2011年。
- ―――、『中世の神学者』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2011年。
- ―――、『女性の神秘家・教会博士』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2011年。
- ―――、『イエスの祈り』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2012年。
- ―――、『新約の祈り』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2013年。
- 教皇ベネディクト十六世／教皇フランシスコ、『信条（クレド）――教皇講話集』カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳、カトリック中央協議会、2014年。

1.3. その他

- ベネディクト 16 世 ヨゼフ・ラツィンガー『新ローマ教皇 わが信仰の歩み』里野泰昭訳、春秋社、2005年。
- ―――、「靈的遺言」岩本潤一訳、『上智大学キリスト教文化研究所紀要』40（2023年3月24日）77-82頁。【資料1】
- 教皇ベネディクト 16 世 ヨゼフ・ラツィンガー『ナザレのイエス』里野泰昭訳、春秋社、2008年。
- 名誉教皇ベネディクト 16 世 ヨゼフ・ラツィンガー『ナザレのイエスⅡ 十字架と復活』里野泰昭訳、春秋社、2013年。
- ―――、『ナザレのイエス プロローグ：降誕』里野泰昭訳、春秋社、2013年。
- ―――（岩本潤一訳）、「教皇ベネディクト十六世のドイツ連邦議会での演説（翻訳と解説）（2011年9月22日）」『カトリック社会福祉研究』第12号（終刊号）（2012年）173-189頁。
- 「教皇ベネディクト十六世の教皇在位中の活動（年表）」カトリック中央協議会ウェブサイト

(<https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2016/05/resignation02-5.pdf>)、2013年2月27日。

「ベネディクト 16 世の逝去に伴う「ロジト」(2023 年 1 月 5 日)」バチカン放送局訳、2013 年 1 月 5 日

(<https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2023-01/rogito-papa-emerito-benedetto-xvi.html>)。【資料 2】

教皇庁国際神学委員会『人間の尊厳と科学技術』岩本潤一訳、カトリック中央協議会、2006 年。

———、『洗礼を受けずに亡くなった幼児の救いの希望』岩本潤一訳、カトリック中央協議会、2010 年。

———、『普遍的倫理の探求——自然法の新たな展望』岩本潤一訳、カトリック中央協議会、2012 年。

Benedikt XVI., *Letzte Gespräche* mit Peter Seewald, Droemer Verlag, München 2016 /Pope Benedict XVI, *Last Testament in his own words* with Peter Seewald translated by Jacob Phillips, Bloomsbury Continuum, London/New York 2016.

Benedetto XVI, *Che cos'è il cristianesimo. Quasi un testamento spirituale*, Mondadori, Milano 2023.

Gänswein, Georg, Saverio Gaeta, *Nichts als die Wahrheit. Mein Leben mit Benedikt XVI.* Aus dem Italienischen übersetzt von Friederike Hausmann, Katja Issing, Stefanie Römer und Gabriele Stein, Herder, Freiburg/Basel/Wien 2023.

Seewald, Peter, *Benedikt XVI. Ein Leben*, Droemer Verlag, München 2020 /Peter Seewald, Translated by Dinah Livingstone, *Benedict XVI: A Life*, Volume I. Youth in Nazi Germany to the Second Vatican Council 1927-1965, Bloomsbury Continuum, London 2020,; Volume II. Professor and Prefect to Pope and Pope Emeritus 1966-The Present, Bloomsbury Continuum, London/Dublin 2021.

2. ベネディクト十六世に関する研究・書評等

岩本潤一『現代カトリシズムの公共性』知泉書館、2012 年。

———、『教皇ベネディクト十六世在位 3 周年 和解と調和へ自らを捧げ 世界に相次ぎメッセージ』『キリスト新聞』第 3052 号 (2008 年 5 月)、2 面。

———、『この一冊 教皇ベネディクト十六世『教父』』『福音宣教』63 巻 4 号 (2009 年 4 月) 36 頁。

———、『この一冊 教皇ベネディクト十六世『聖パウロ』』『福音宣教』63 巻 5 号 (2009 年 5 月) 36 頁。

———、『「パウロ年」から「司祭年」へ』『福音宣教』63 巻 8 号 (2009 年 8 月)、44-45 頁。

———、『文献・図書紹介 教皇ベネディクト 16 世ヨゼフ・ラツィンガー『ナザレのイエス』』

- 『カトリック教育研究』第27号(2010年)63-64頁。
- 、「『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約』——その神学的意味」『日本カトリック神学院紀要』第2号(2011年)、157-174頁。
- 、「シンポジウム カトリック教会のカテキズム 発題一 『カトリック教会のカテキズム』と『カトリック教会のカテキズム要約』」『日本カトリック神学会誌』第22号(2011年)、1-14頁。
- 、「出会い・本・人 ベネディクト十六世の信仰」『本のひろば』第657号(2012年12月号)(2012年11月1日)、1頁。
- 、「現代カトリシズムの公共性」『日本カトリック神学院紀要』第4号(2013年)、59-74頁。
- 、「ベネディクト十六世の平和の神学」『カトリック研究』第82号(2013年)、129-160頁。
- 、「ベネディクト16世の教導職における自然法論」『カトリック教育研究』第30号(2013年8月31日)、1-12頁。
- 、「現代カトリシズムと自然法論——最近の動向」『宗教法』第33号(2014年)、27-58頁。
- 、「信仰の合理性——現代カトリシズムの公共性をめぐって」『東洋学術研究』第55巻第2号(通巻177号)(2016年)、38-59頁。
- 、「『聖書 聖書協会共同訳』——回顧と展望」『New 聖書翻訳』No.5(2019年)、1-21頁。
- 、「書評 ベネディクト十六世／ペーター・ゼーヴァルト『最後の対話』
Benedikt XVI., *Letzte Gespräche mit Peter Seewald*, Droemer Verlag, München 2016, 288 Pages/Pope Benedict XVI, *Last Testament in his own words* with Peter Seewald translated by Jacob Phillips, Bloomsbury Continuum, London/New York 2016, 257 Pages」『上智大学キリスト教文化研究所紀要』38(2020年)、84-88頁。
- 、「巻頭言 『聖書 聖書協会共同訳』発行の意義」『神学ダイジェスト』第130号(2021年)、1-7頁。
- 、「書評 ペーター・ゼーヴァルト『ベネディクト十六世 ある生涯』
Peter Seewald, *Benedikt XVI. Ein Leben*, Droemer Verlag, München 2020, 1150 Pages/Peter Seewald, Translated by Dinah Livingstone, *Benedict XVI: A Life*, Volume I. Youth in Nazi Germany to the Second Vatican Council 1927-1965, Bloomsbury Continuum, London 2020, 500 Pages; Volume II. Professor and Prefect to Pope and Pope Emeritus 1966-The Present, Bloomsbury Continuum, London/Dublin 2021, 568 Pages」『上智大学キリスト教文化研究所紀要』39(2022年)、109-112頁。
- 、「[書評と翻訳]戸田聡『古代末期・東方キリスト教論集』新教出版社、二〇二二年、三九八頁／教皇ベネディクト十六世『靈的遺言』

Toda Satoshi, *Treatises on Late Antiquity and Eastern Christianity*, Shinkyō Shuppansha, 2022, 398 Pages/Benedict XVI, *My spiritual testament* 『上智大学キリスト教文化研究所紀要』40 (2023年) 77-82頁。

コモンチャク、ジョセフ・A. 「〈小特集 教皇辞任と新教皇選出〉ベネディクト十六世の謙遜：求められるローマの謙遜」『神学ダイジェスト』114号 (2013年)、111-114頁。

佐藤直子「本・批評と紹介 聖性への普遍的召命 教皇ベネディクト十六世著、カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳『女性の神秘家・教会博士』」『本のひろば』2011年12月号、18-19頁。

スタインフェルズ、ピーター「神の御顔たるイエス〈特集 ベネディクト十六世著『ナザレのイエス』〉」『神学ダイジェスト』105号 (2008年)、38-42頁。

ゼーディング、トマス「一聖書学者の応答〈特集 ベネディクト十六世著『ナザレのイエス』〉」『神学ダイジェスト』105号 (2008年)、26-37頁。

高柳俊一「書評 イヴ・コンガール著『ある神学者の日記 一九四六～一九五六年』、同 著『公会議中の私の日記』(全二巻)、ハンス・キューング著『戦い取った自由』、ヨーゼフ・ラッツィンガー著『私の生涯から・回想 一九二七～一九七七年』」『カトリック研究』74号 (2005年)、154-172頁

———、「〈書評〉 ジョン・アレン著『ベネディクト十六世の登場・彼の選挙と教会をどこへ導く方向』 アンドルー・グリーンリー著『教皇選挙まで・教皇ベネディクト十六世の選択とそれが今日のカトリック教会にとって何を意味するか』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、81-84頁。

———、「〈書評〉 ジョージ・ワイゲル著『神の選択・教皇ベネディクト十六世と教会の未来』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、89-91頁。

———、「〈書評〉 ロバート・ブレア・カイザー著『自分自身のあり方を模索する教会・ベネディクト十六世と未来のための戦い』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、98-100頁。

———、「〈書評〉 ポール・コリンズ著『神の新しい人・ベネディクト十六世の選出とヨハネ=パウロ二世の遺産』 ルパート・ショート著『ベネディクト十六世・信仰の司令官』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、84-89頁。

———、「〈書評〉 エイダン・ニコルズ O・P・著『ベネディクト十六世の神学思想・ヨーゼフ・ラッツィンガー神学入門』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、91-94頁。

———、「〈書評〉 デイヴィッド・ギブソン著『ベネディクトの統治・教皇ベネディクト十六世と近代世界との戦い』」『キリスト教文化・東洋宗教研究所紀要』25号 (2006年)、95-98頁。

———、「〈書評〉 ヨゼフ・ラッツィンガー=ベネディクト十六世著『信仰、真理、寛容：キリスト教と世界の諸宗教』」『カトリック研究』75号 (2006年)、193-203頁。

- 、「〈書評〉ヨゼフ・ラッツィンガー＝ベネディクト16世著『ナザレのイエス』：第1部「ヨルダン川での洗礼から変容まで」『カトリック研究』77号（2008年）、151-155頁。
- 、「〈書評〉ペーター・クーン編『イエスをめぐる討論—教皇ベネディクト十六世、マルティン・ヘンゲル、ペーター・シュトゥールマハー、教え子との対話（カステロガンドルフォにて）』『キリスト教文化研究所紀要』第29号（2011年）、103-105頁。
- 、「本・批評と紹介 中世神学が現代に語るもの ベネディクト十六世著、カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳『中世の神学者』』『本のひろば』2011年8月号、14-15頁。
- 、「〈書評〉ヨゼフ・ラッツィンガー＝ベネディクト十六世著『ナザレのイエス』：第二巻「エルサレム到達から復活まで」『カトリック研究』第81号（2012年）、215-222頁。
- 、「〈書評〉ヨゼフ・ラッツィンガー＝ベネディクト十六世著『ナザレのイエス』：プロローグ「幼年物語」『カトリック研究』第82号（2013年）、185-187頁。
- 徳善義和「本・批評と紹介 ただ、キリストとその福音に生かされたパウロ 教皇ベネディクト十六世著、カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳『聖パウロ』』『本のひろば』2009年7月号、20-21頁。
- マルクス、ハンス ユーゲン「文明の対話—新しい世界統治と教皇ベネディクト一六世—」『南山神学』第30号（2007年）、1-25頁。
- 水垣渉「本・批評と紹介 教父—この「遠くで輝くまことの星」—に近づくために 教皇ベネディクト十六世著、カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画編訳『教父』』『本のひろば』2009年6月号、28-29頁。
- 宮川俊行「教皇ベネディクト十六世 社会回勅「カリタス・イン・ヴェリターテ(Caritas in veritate)」について」『カトリック社会福祉研究』第12号（2012年）、1-70頁。
- 吉田新「BasisBibelと聖書翻訳の未来」『New 聖書翻訳』第8号（2022年）、59-75頁。
- レーザー、ヴェルナー「『ナザレのイエス』への十二の手引き〈特集 ベネディクト十六世著『ナザレのイエス』〉」『神学ダイジェスト』105号（2008年）、8-25頁。

【資料 1】

ベネディクト十六世

2006年8月29日

霊的遺言⁸²

この人生の晩年において、歩んできた数十年を振り返るとき、まずわたしは、感謝しなければならぬどれだけ多くの理由があるかを見いだします。何よりも神ご自身に感謝します。神はあらゆる善い賜物の与え主であり、わたしに命を与え、さまざまな混乱の時にわたしを導いてくださいました。わたしが転ぶたびにわたしを立ち上がらせ、新たなみ顔の光をいつもわたしに注いでくださいました。顧みて、これまでの歩みの暗闇と困難の時にさえもわたしの救いのためであり、その時の中で神がわたしを導いてくださったことが分かります。

わたしは両親に感謝します。二人は困難な時代の中でわたしに命を与え、大きな犠牲と愛をもってわたしにすばらしい家庭を用意してくれました。この家庭は今日に至るまで日々明るい光を輝かせてくれました。父の透明な信仰は、われわれ子どもたちに信じることを教え、わたしのあらゆる学問的認識の中でますます堅固な道しるべとなってくれました。母の深い信心と大きないつくしみは、感謝し尽くすことのできない遺産であり続けています。姉は数十年にわたり献身的に優しい気遣いをもってわたしに仕えてくれました。兄は透明な判断と力強い決意とほがらかな心で常にわたしの道を平らにしてくれました。兄が常にわたしに先立って歩み、同伴してくれなかったなら、わたしは正しい道を見いだすことができなかつたでしょう。

心から神に感謝します。わたしのそばに神が置いてくださった多くの男性と女性の友人たちのゆえに。わたしの歩みのあらゆるときの協力者たちのゆえに。神がわたしに与えてくださった教師と学生のゆえに。このすべての人々を神のいつくしみにゆだねます。アルプスのふもとにあるバイエルンの美しい家のゆえにも主に感謝したいと思います。この家で、わたしは造り主ご自身が輝きを放つのを常に目にすることができたからです。信仰のすばらしさを絶えず味わわせてくれた故郷の人々に感謝します。故国が信仰の地であり続けることを祈ります。親愛なる故国の人々にお願いします。あなたがたの信仰から離れないでください。最後に、わたしの歩みのさまざまな時を通じて、特にわたしの第二の故郷となったローマとイタリアで経験することのできた、数々のすばらしいことのゆえに神に感謝します。

わたしが何らかのしかたで過ちを犯したすべての人々に心からゆるしを願います。

82 原文 (Mein geistliche Testament; Il mio testamento spirituale) は、名誉教皇ベネディクト 16 世が逝去した 2022 年 12 月 31 日にバチカン広報部から発表されたドイツ語・イタリア語版による。聖座ウェブサイトでは、2023 年 1 月 4 日現在、このほかに仏・英・葡語訳が掲載されている

(<https://www.vatican.va/content/benedict-xvi/it/elezione/documents/testamento-spirituale-bxvi.html>)。

すでに故国⁸³の人々に述べたことを、わたしが教会で仕えるようにゆだねられたすべての人々にここで申し上げたいと思います。信仰を固く保ってください。信仰から離れてはなりません。しばしば、一方では科学、すなわち自然科学が、他方で歴史的研究（特に聖書釈義）が、論駁不能な、カトリック信仰と反対の知見を提示するかのように見えます。わたしは、はるか昔から自然科学が変化するのを目にしてきました。そして、逆に、信仰に反する見せかけの確信は消えうせ、それは科学ではなく、見かけ上科学に属するものにすぎない哲学的解釈であったことが明らかになりました。むろん信仰もまた、自然科学との対話によって、その主張の範囲の限界と自らの独自性を認識することを学びました。わたしは60年来、神学、特に聖書学を学んできました。そして、何世代にもわたり、揺るぐことがないかのように思われていた命題が崩壊し、単なる仮説にすぎないものだったことが明らかになるのを目にしてきました。自由神学の世代（ハルナック、ユリヒャーなど）、実存主義の世代（ブルトマンなど）、マルクス主義の世代です。わたしは、混乱した仮説から信仰の合理性⁸⁴が立ち現れ、今も立ち現れ続けているのを目にしてきました。イエス・キリストはまことに道であり、真理であり、命です⁸⁵。そして教会は、そのあらゆる不十分さにもかかわらず、まことにキリストの体です⁸⁶。

最後に、つつしんでお願いします。わたしのために祈ってください。主が、わたしのあらゆる罪と欠点にもかかわらず、わたしを永遠の住まいに受け入れてくださいますように。わたしにゆだねられたすべての人々のために、日々、心から祈ります。

教皇ベネディクト十六世

83 ドイツ。

84 *ragionevolezza della fede; Vernunft des Glaubens.*

85 ヨハ 14:6。

86 エフェ 1:23、コロ 1:24 参照。

【資料 2】

ベネディクト 16 世の逝去に伴う「ロジト」

名誉教皇ベネディクト 16 世の逝去に伴い、在位中の功績などを記した証書「ロジト」が起草され、棺の中に入れられた。

2023 年 1 月 5 日、名誉教皇ベネディクト 16 世の葬儀に続き、聖ペトロ大聖堂の地下、「グロッテ」への埋葬が行われた。

故名誉教皇は、自身が生前に希望したように、前任者、聖ヨハネ・パウロ 2 世の墓がかつてあった場所に埋葬された。聖ヨハネ・パウロ 2 世の墓は、現在、聖ペトロ大聖堂の本堂にある。

ベネディクト 16 世の棺の中には、故名誉教皇の在位中に発行された硬貨とメダル、牧者の象徴であるパリウムと共に、在位中の功績等をラテン語で記した証書「ロジト」が入れられた。

教皇の逝去に伴い起草される「ロジト」は、故教皇の生涯、在位中の功績等をラテン語で簡潔に記した公式証書で、金属の筒に入れ封印したものを棺の中に入れる。

ベネディクト 16 世の「ロジト」の本文の部分は、以下のとおり。

名誉教皇ベネディクト 16 世の敬虔なる死のための証書

死者の中から復活されたキリストの光のもとに、紀元 2022 年 12 月 31 日、午前 9 時 34 分、この年が終わろうとし、わたしたちが主から賜った多くの恵みのために「テ・デウム」を歌おうとしていた時、教会の愛する名誉教皇、ベネディクト 16 世は、この世から御父のもとに移られた。全教会は、教皇フランシスコ聖下と共に、祈りのうちに、その逝去を見守った。

ベネディクト 16 世は、第 265 代教皇であった。その記憶は、教会と全人類の心にとどめられるものである。

2005 年 4 月 19 日、教皇に選出された、ヨセフ・アロイジウス・ラッツィンガーは、パッサウ教区（ドイツ）内の、マルクトル・アム・インに、1927 年 4 月 16 日に生まれた。彼の父は警察官で、バイエルン南部の農家の出身、その経済的状況はつましいものであった。母はキーム湖のほとり、リムスティングの職人の娘で、結婚前はいくつかのホテルで調理をしていた。

幼少期と少年期を、オーストリア国境に近く、ザルツブルグからおよそ 30 km の小さな町、トラウンシュタインで過ごし、ここでキリスト教的・人間的・文化的育成を受けた。

青少年期の時代は、決して容易なものではなかった。家庭の信仰と教育が、カトリック教会への強い敵意で知られる、ナチス政権にまつわる諸問題の過酷な体験に備えさせた。

この複雑な状況の中で、キリスト教信仰の素晴らしさと真理を見出すことになった。

1946 年から 1951 年まで、フライジングの哲学・神学高等学院、およびミュンヘン大学

で、哲学と神学を学んだ。1951年6月29日、司祭叙階。その翌年から、フライジングの高等学院で教職活動を開始した。この後、ボン、ミュンスター、テュービンゲン、レーゲンスブルクでも教鞭を取った。

1962年、ヨセフ・フリングス枢機卿の神学顧問として、第2バチカン公会議の正式な専門家となった。1977年3月25日、教皇パウロ6世によって、モナコフライジング大司教に任命され、同年5月28日に司教叙階。司教モットーは、「真理の協働者」。

パウロ6世によって、1977年6月27日の枢機卿会議で、枢機卿に叙任された。名義は、サンタ・マリア・コンソラトリーチェ・アル・ティブルティーノ。

1981年11月25日、ヨハネ・パウロ2世によって、教皇庁教理省長官に任命される。翌年2月15日、モナコフライジング大司教区の教区長を引退。

1998年11月6日、枢機卿団副主席。2002年11月30日、枢機卿団主席、名義は、スブルビカリア・ディ・オステア。

2005年4月8日、ヨハネ・パウロ2世の葬儀ミサを聖ペトロ広場で司式した。

2005年4月19日、コンクラーベに集った枢機卿たちの中から、教皇に選出され、ベネディクト16世を名乗った。祝福のロτζジャから、自らを「主のぶどう畑のいやしい働き手」と紹介した。2005年4月24日、その教皇職を正式に開始した。

ベネディクト16世は、その在位の中心に神と信仰のテーマを据えた。主イエス・キリストの御顔の追求を続ける中で、特に著書「ナザレのイエス」全3巻の発表を通して、すべての人がその御顔を見出せるように助けた。聖書と神学における広く深い知識に恵まれ、教理的、霊的な主要テーマ、また教会生活と現代文化の重要問題について、照らされた総括を作り出すたぐいまれな才能を持っていた。

英国国教会、ユダヤ教、他の諸宗教との対話を、成果をもって推進した。また同様に、聖ピオ10世共同体の司祭たちとの接点を取り戻した。

2013年2月11日、3人の福者の列聖をめぐり召集した枢機卿会議での投票後、教皇職から引退する旨を次のようにラテン語で宣言した。

「わたしの良心を繰り返し神の御前で確かめた後、わたしの力は、高齢のため、教皇職をよりよく遂行するためにもう適していないという確信を得ました。この教皇職が、その霊的本質ゆえに、行動と言葉だけでなく、苦しみ、祈りつつ、完成させられるべきであることはよく知っています。しかしながら、速い変化と、信仰生活に対する大きな問題によって揺れる今日の世界において、聖ペトロの船を治め、福音を告げるためには、心身の活力が必要ですが、ここ数ヶ月、自分に託された任務をよりよく遂行するための力がないことが自覚されるほど、その活力が減じてきました。そのために、この行為の重大さをよく自覚した上で、完全な自由をもって、2005年4月19日に枢機卿たちによってわたしの手に託されたローマの司教職、聖ペトロの後継者の位を引退することを宣言します」。

2013年2月27日、教皇在位中最後の一般謁見で、すべての人、一人ひとりに、自身の決意を受け入れてくれたその尊重と理解に感謝を述べた。そして、「わたしは教会の歩みを、

祈りと考察をもって、わたしが今日まで毎日生き常に生きたいと願う主とその花嫁への献身をもって、これからも見守るでしょう」と約束した。

カステル・ガンドルフォでの短い滞在の後、生涯の最後の年月を、バチカンのマーテル・エクレジエ修道院で、祈りと観想に専念しつつおくれた。

ベネディクト 16 世の教理的教えは、3 つの回勅、『神は愛』（2005 年 12 月 25 日）、『希望による救い』（2007 年 11 月 30 日）、『真理に根ざした愛』（2009 年 6 月 29 日）に要約される。4 つの使徒的勧告、数多くの使徒憲章、使徒的書簡、さらには一般謁見のカテケシス、世界における 24 回の司牧訪問の際の言葉も含めた講話を教会に残した。

蔓延する相対主義と実践的無神論を前に、2010 年、自発教令「ウビクンクエ・エト・センペル」をもって、教皇庁新福音化推進評議会を創設、2013 年 1 月、カテケシスに関する事項における管轄を同評議会へ移管した。

聖職者の代表が未成年者や弱い立場にある人々に行った犯罪と毅然と闘い、教会を回心と、祈り、悔い改め、清めへと招き続けた。権威ある神学者として、信仰の本質的真理をめぐる学問と研究の豊かな遺産を残した。

聖なる父よ、キリストのうちに永遠に生きんことを！

(バチカン放送局訳)